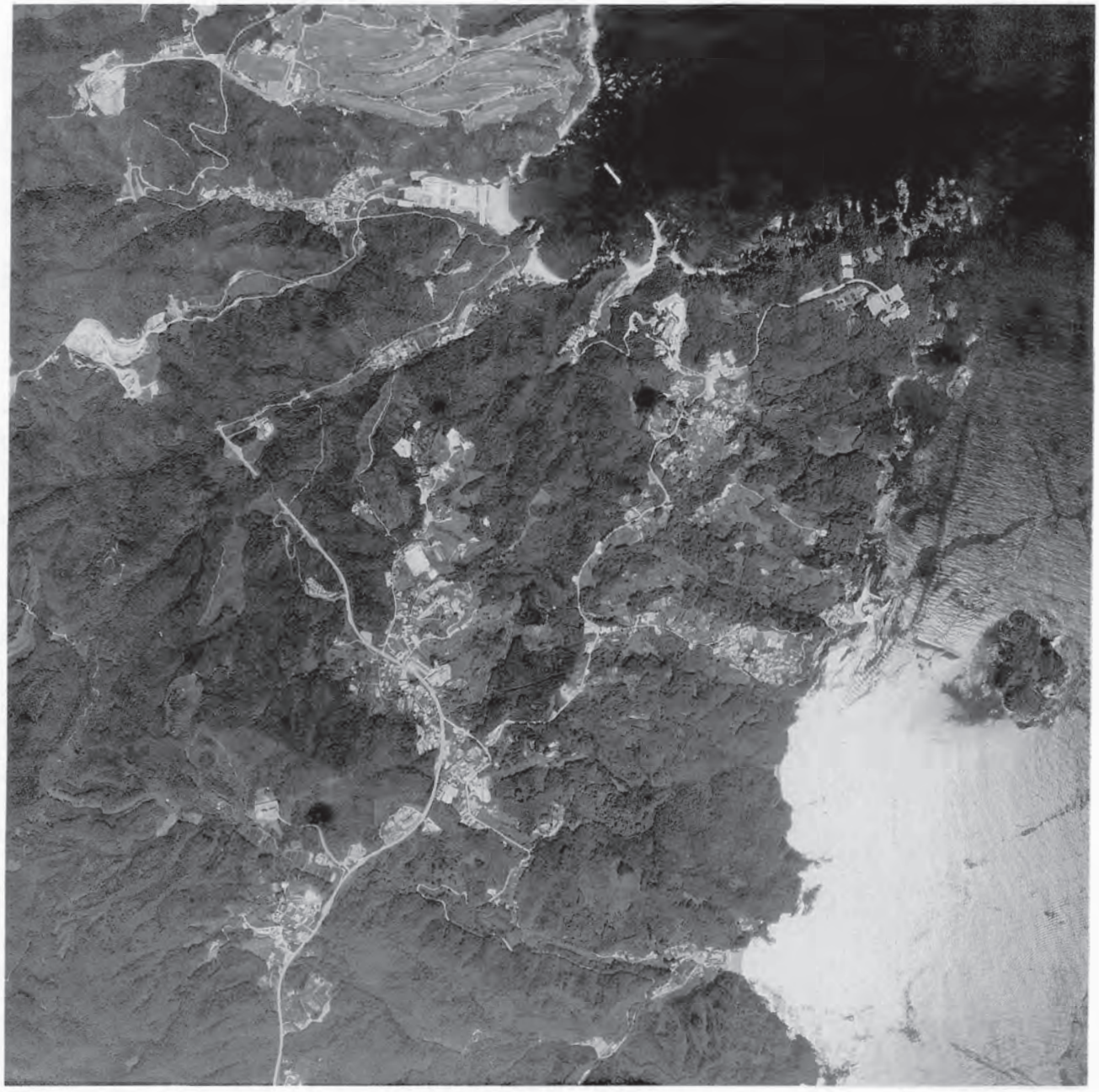
宮古市埋蔵文化財調査報告書13
Archaeological Researches in Miyako

崎山遺跡群 I

—昭和61年度発掘調査概報—



1 崎山遺跡群垂直写真

1987.3
岩手県宮古市教育委員会
The Board of Education Miyako, Iwate Pre.

2 崎山遺跡群航空写真

序　　文

三陸海岸のほぼ中央に位置する宮古市付近は、起伏に富んだ変化のある地形が作り出す美しい景観に恵まれたところであります。

海や山、川には数千年も前から変わらぬ食糧資源が満ちており、この豊かさに支えられた人々は、おそらくはのびやかな生活を営んでいたことでしょう。

宮古市内には、現在400ケ所にも及ぶ遺跡が確認されていますが、この遺跡は数千年前の縄文時代から古代・中世・近世までの人々のくらしぶりを私たちに語り伝えてくれる貴重な遺産であります。

私たちは、このような遺跡を正しい理解とともに保護し、後世の人々へ伝えてゆく責務があると考えております。

本書は、国庫・県費補助を受けて実施した崎山遺跡群発掘調査事業の初年度の成果をまとめた概報であります。

この崎山遺跡群発掘調査の結果、崎山貝塚からは自然遺物、土器および石器など先人の生活を物語る上で貴重な遺物が数多く発見されており、市内の遺跡の中でも重要なものの一つであることがわかってまいりました。このため、発掘調査を継続して実施し、その内容をより詳細に究明するとともに、今後何らかの保存対策を講じてまいりたいと考えております。

最後に、本書が郷土の歴史研究および文化財保護に対する理解を深めるための資料として活用されることを願い序文といたします。

宮古市教育委員会

教育長　小野寺　　聰

例　　言

1．本書は昭和61年度に国庫補助を受けて実施した崎山遺跡群白石遺跡第１次調査および崎山貝塚第１次調査の概報である。

2．発掘調査の主体は宮古市教育委員会（教育長・小野寺聰）で、発掘調査および本書の執筆編集は高橋が担当した。なお、剥片石器の実測と原稿執筆は主事・武田将男が担当し、編集にあたっては非常勤職員・鎌田祐二の協力を得た。

3．調査座標は平面直角座標第Ｘ系を座標交換して使用したが、調査用の局地的な座標系であることを明示するためにＲを冠して表示した。

座標軸方向 ――― 第Ｘ系に準じる

調査座標原点 ―― Ｘ－35800.000、Ｙ＋97000.000

4．高さは標高値をそのまま使用した。

5．遺物の表現については繊維を含む土器および敲打磨石類の磨面を次のように表示した。

6．発掘調査および遺物の整理、報告書の執筆に際しては次の方々から御教示、御指導をいただいた。記して謝意を申し上げる。（敬称略）

林　　謙作　（北海道大学）
岡村　道雄　（東北歴史資料館）
瀬川　司男　（崎山中学校）
相原　康二　（岩手県教育委員会文化課）
小田野哲憲　（岩手県立博物館）
熊谷　常正　（岩手県立博物館）
佐藤　正彦　（陸前高田市立博物館）

なお、自然遺物の同定については林氏、岡村氏、熊谷氏、佐藤氏の全面的協力があった。

7．本文中の引用文献の略称は下記のとおりとした。（いずれも宮古市教育委員会刊行）

1979　『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』　小田野哲憲・熊谷　常正 ―→『大付報文79』

1983～86　『宮古市遺跡分布調査報告書　１～４』　武田将男 ―→『分布調査　１～４』

1986　『宮古市遺跡分布図　昭和60年度版』　武田将男 ―→『分布図86』

目　　次

序　文
例　言
目　次

Ⅰ　調査経過 …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．崎山遺跡群をめぐる研究小史 …… 1
　3．調査要旨 …… 2
　4．調査体制 …… 2

Ⅱ　崎山遺跡群の立地と環境 …… 4
　1．三陸沿岸の貝塚と崎山遺跡群 …… 4
　2．地形、地質と崎山遺跡群の立地 …… 4

Ⅲ　調査内容 …… 8
　1．白石遺跡第１次調査 …… 8
　　(1)　遺構の検出状況 …… 8
　　(2)　出土遺物 …… 8
　2．崎山貝塚第１次調査 …… 12
　　(1)　遺跡の現況 …… 12
　　(2)　調査の方法 …… 12
　　(3)　基本層序 …… 12
　　(4)　出土遺物 …… 18
　　(a)　土器 …… 18
　　(b)　石器 …… 32
　　(c)　土製品・石製品 …… 41
　　(d)　骨角器 …… 41
　　(e)　自然遺物 …… 41

Ⅳ　調査のまとめ …… 46

図 版 目 次

第１図版　白石遺跡第１次調査区航空写真、調査区全景
第２図版　白石遺跡第１次調査区全景、遺構検出状況
第３図版　白石遺跡第１次調査遺物包含層堆積状況・検出遺構（P_3・P_2）
第４図版　崎山貝塚全景
第５図版　崎山貝塚全景、崎山貝塚第１次調査区全景
第６図版　崎山貝塚第１次調査遺物包含層堆積状況
第７図版　崎山貝塚第１次調査遺物包含層堆積状況、自然遺物包含層堆積状況
第８図版　崎山貝塚第１次調査遺物出土状況
第９図版　崎山貝塚第１次調査自然遺物出土状況
第10図版　崎山貝塚第１次調査遺物出土状況、出土遺物
第11図版　崎山貝塚第１次調査出土遺物
第12図版　崎山貝塚第１次調査出土遺物
第13図版　崎山貝塚第１次調査出土遺物

１．崎山遺跡群垂直写真

２．崎山遺跡群航空写真（カラー）

挿 図 目 次

第１図　位置図 …… 3
第２図　崎山遺跡群と周辺の遺跡 …… 5
第３図　地形分類図 …… 6
第４図　表層地質図 …… 7
第５図　白石遺跡第１次調査区周辺地形図 …… 8
第６図　白石遺跡第１次調査区全体図 …… 9・10
第７図　白石遺跡第１次調査土層断面図・出土遺物 …… 11
第８図　崎山貝塚周辺地形図 …… 13・14
第９図　崎山貝塚第１次調査区全体図 …… 15
第10図　崎山貝塚第１次調査No.１～４グリッド・No.15～22グリッド …… 17
第11図　崎山貝塚第１次調査出土土器(1) …… 19
第12図　崎山貝塚第１次調査出土土器(2) …… 20
第13図　崎山貝塚第１次調査出土土器(3) …… 21
第14図　崎山貝塚第１次調査出土土器(4) …… 22
第15図　崎山貝塚第１次調査出土土器(5) …… 24
第16図　崎山貝塚第１次調査出土土器(6) …… 25
第17図　崎山貝塚第１次調査出土土器(7) …… 26
第18図　崎山貝塚第１次調査出土土器(8) …… 28
第19図　崎山貝塚第１次調査出土土器(9) …… 29
第20図　崎山貝塚第１次調査出土土器(10) …… 30
第21図　崎山貝塚第１次調査出土土器(11) …… 31
第22図　崎山貝塚第１次調査出土石器(1) …… 33
第23図　崎山貝塚第１次調査出土石器(2) …… 34
第24図　崎山貝塚第１次調査出土石器(3) …… 35
第25図　崎山貝塚第１次調査出土石器(4) …… 37
第26図　崎山貝塚第１次調査出土石器(5) …… 38
第27図　崎山貝塚第１次調査出土石器(6) …… 39
第28図　崎山貝塚第１次調査出土石器(7) …… 40
第29図　崎山貝塚第１次調査出土土製品・石製品・骨角器・自然遺物 …… 43
第30図　崎山貝塚第１次調査出土自然遺物 …… 45

Ⅰ　調査経過

1．調査にいたる経過

第１期市内遺跡分布調査

宮古市では昭和57年度から昭和60年度にかけて、市内に存在する遺跡の詳細分布調査を行い、その内容を『分布調査　1～4』の報告書および『分布図　86』の遺跡台帳として刊行してきた。

分布調査の結果、崎山地区には自然遺物や人骨の出土で知られる崎山貝塚や大付遺跡などの重要な遺跡が多く、比較的良好な状態で保存されているものが多いという理由から、市内に存在する遺跡群の中にあって最も重要なものの一つに上げられた。

第１期５ケ年計画

ところが、近年崎山地区にも宅地造成などの開発の波が押し寄せて来ており、これに対応した事前の緊急調査が毎年のように実施され、次第にその規模や件数が拡大する傾向にあると言える。そこで、当市教育委員会では崎山地区に存在する遺跡群の内容を把握し、保存のための資料収集を目的とし、５ケ年計画で崎山遺跡群の発掘調査事業を策定し、崎山貝塚を中心とする範囲確認調査および個人住宅建築などに先だつ緊急調査を行うこととした。

2．崎山遺跡群をめぐる研究小史

明治時代

明治42年７月、岸上鎌吉（当時東京帝国大学農科大学教授）は『日本史前漁業』編纂資料収集のため来宮し、中島吉兵衛（鍬ヶ崎尋常小学校勤務）を案内に鍬ヶ崎館山貝塚で３日間の調査を行い多くの骨角器や魚骨などの自然遺物を得た。以来、岸上は明治43年７月、同44年11月と再三にわたり来宮し調査活動を続けた。岸上に触発された中島もこの間独自に鍬ヶ崎館山貝塚や大付遺跡（当時は大付貝塚）の発掘を行い、多くの資料を得、岸上に提供している。これらの資料は明治44年に刊行された岸上の名著『Prehistoric Fishing in Japan』において重要な部分を占めている。また、中島は翌明治45年、『先史遺物帖』を作成している。これは鍬ヶ崎館山貝塚の調査報告書とも言うべきもので、骨角器の分類、記述の内容、実測図の正確さなど質的にも高いものがあるが、何よりも自らが収集した資料をこのような形でまとめ上げる姿勢には最大の評価が与えられるべきである。（註１）

このように明治末年の岸上の来宮から、貝塚遺跡を中心とする当地方の本格的調査が開始されたと言っても過言ではないが、その中にあって崎山地区の遺跡（大付遺跡など）は重要な位置を占めている。

大正時代

中島はこの後も積極的に調査地域を拡大していく。大正11年に刊行された『下閉伊郡史』「付録・石器時代遺跡考」の中で中島は下閉伊管内に百数十ケ所の遺跡を確認している。その中で貝塚遺跡はわずかに鍬ヶ崎町館山貝塚、崎山村大付貝塚、磯鶏村蝦夷ヶ森貝塚、船越村船越貝塚、田野畑村羅賀貝塚の５ケ所のみである。また、崎山村内の遺跡では大付の他に崎山、日

（註１）　中島は岸上の他に坪井正五郎や柴田常恵らとも交流があり、指導をうけている。『先史遺物帖』は未刊であるが、『分布調査１』や『宮古市史、漁業交易』などにその一部が紹介されている。

出島、ワタノハ、古里を上げている。この時点では崎山貝塚や磯鶏上村貝塚などは貝塚遺跡として確認されていないようである。

大正13年、内務省考査員の柴田常恵は小田島禄郎らの案内で岩手県東海岸の遺跡踏査を行うが、気仙地方の調査終了後３日間宮古地方に立ち寄り調査を行っている。初日は蝦夷森貝塚の発掘調査を行い縄文時代の屈葬人骨１体を検出している。二日目は大付貝塚に向かう途中立ち寄った崎山貝塚で発掘調査を行い、鹿、鮪、鯨の骨や貝層を確認している。この後、史跡指定の有力候補地であった大付遺跡の発掘調査を行っているが、残念ながら柴田らの調査地点からは良好な貝層や資料が得られなかったために指定はなされなかった。

崎山貝塚の確認

昭和２年、小田島は県北部の貝塚遺跡などの踏査を行うがこの時に鍬ヶ崎館山貝塚、崎山貝塚、大付遺跡も踏査している。これ以後宮古地方では目立った動きはみられなくなる。

昭和40年代以降、国道45号線の整備や学校建設をはじめとする公共事業や各種民間開発が増大するが保護行政側の立ち遅れから十分な調査が行われずに多くの遺跡が破壊され、文化財の保護が大きな問題として表面化し始める。こうした中で、昭和53年度に国庫補助を受けて大付遺跡の緊急調査が行われた。これは個人住宅建築にともなうものであるが、人骨をはじめとする貴重な資料を多く検出し、その成果は『大付報文79』にまとめられている。翌昭和54年度以降宮古市も継続的かつ計画的な文化財保護を行うべく担当の職員を配置し、現在に至っている。

３．調査要旨

昭和61年度の発掘調査は、白石遺跡第１次調査（個人住宅建築）と崎山貝塚第１次調査（範囲確認）の２件である。総事業費は200万円（国庫、県費補助）である。

○白石遺跡第１次調査　昭和61年５月７日～５月24日　500㎡

遺跡の東端部に位置し、縄文時代のピット群と遺物包含層を検出している。

○崎山貝塚第１次調査　昭和61年11月５日～11月22日　88㎡（うち５㎡を精査）

貝塚の南斜面を調査し、縄文時代前期に伴う自然遺物包含層、貝ブロック、遺物包含層などを検出している。

４．調査体制

発掘調査の体制は次のとおりである。

調査総括	北山　浩	宮古市教育委員会社会教育課長
	佐々木孝夫	宮古市教育委員会社会教育係長
調査員	高橋憲太郎	宮古市教育委員会社会教育係主事

調査の実施にあたり、次の各位から多大の御協力をいただいた。（敬称略）

〈地権者〉　山下永太郎、後藤正吉、前川孫八

〈発掘調査〉　阿部豊、村岡憲一、大森洋、吉田昭、竹田末人、木村秀男、佐伯裕則、前川友宏、山口勉、坂本卓己、瀬波正昭、大沢卓雄、松登文吾ほかの皆さん

〈整理作業〉　佐々木順子

青森市
八戸市
馬渕川
雨滝遺跡
馬場野遺跡
中曽根遺跡
蒔前台遺跡
馬場平遺跡
久慈市
二子貝塚
根井貝塚
N40°
長者屋敷遺跡
水切場遺跡
茂師貝塚
森の越遺跡
日戸遺跡
大舘町遺跡
柿木平遺跡
崎山遺跡群(崎山貝塚)
宮古市
獺ヶ崎館山貝塚
磯鶏貝塚群
なぎ遺跡
盛岡市
閉伊川
西田遺跡
津軽石川
大地遺遺跡
観音堂遺跡
田ノ浜貝塚
崎山弁天貝塚
鳩岡崎遺跡
九年橋遺跡
滝ノ沢遺跡
長谷堂貝塚
中島遺跡
大洞貝塚
陸前高田市
源野貝塚
蛸の浦貝塚
N39°
東裏遺跡
門前貝塚
草ヶ沢遺跡
中沢浜貝塚
田柄貝塚
北上川
貝鳥貝塚
糖塚貝塚
前浜貝塚
青島貝塚
長根貝塚
古道遺跡
素山貝塚
天雄寺貝塚
上深沢遺跡
南境貝塚
大松沢貝塚
沼津貝塚
勝負沢遺跡
西ノ浜貝塚
里浜貝塚
仙台市
大木囲貝塚
湯坪遺跡
上川名貝塚
槻木貝塚
E141°
E142°
0
1:140000
70km

第1図 位 置 図

II　崎山遺跡群の立地と環境

1．三陸沿岸の貝塚と崎山遺跡群（第1図）

宮古市は、本州の最東端にあたり、青森県から宮城県にわたる三陸海岸のほぼ中央に位置する。沿岸部の遺跡の分布状況を見ると、宮古以南の複雑に入り組んだ沈降性のリアス式海岸に存在する貝塚群が注目される。山田湾～釜石湾沿いの希薄地域に続き、吉浜湾～大船渡湾～広田湾～気仙沼湾沿いに広がる貝塚群がある。この地域には蛸ノ浦貝塚・下船渡貝塚・大洞貝塚・細浦貝塚（以上大船渡市）、中沢浜貝塚・獺沢貝塚・門前貝塚・大陽台貝塚（以上陸前高田市）田柄貝塚（気仙沼市）などの大規模な貝塚が見られる。更に、南の北上川河口部～松島湾沿い～阿武隅川河口部の仙台湾沿岸には、沼津貝塚・南境貝塚（以上石巻市）、西ノ浜貝塚（塩釜市）、里浜貝塚（宮戸島貝塚・鳴瀬町）、大木囲貝塚（七ヶ浜町）、上川名貝塚（柴田町）などの多数の貝塚が存在する。また、北上川下流域には貝鳥貝塚（花泉町）や青島貝塚(南方町)などの主淡貝塚の分布が特徴的である。

宮古以北には隆起性の海岸段丘が続くが、貝塚遺跡の分布は希薄で、根井貝塚（野田村）や二子貝塚（久慈市）などが散発的に存在する。これは、貝塚遺跡自体が希薄なのと同時に分布調査が徹底していないことなどが理由として上げられる。

宮古市内には、崎山地区の他に、閉伊川河口付近の北岸に鍬ヶ崎館山貝塚や小沢貝塚が、南岸または八木沢川河口付近には蝦夷森貝塚・上村貝塚・小沢田貝塚が存在する。閉伊川河口の貝塚群は、宮古以南の気仙地方などの貝塚群に、崎山地区の貝塚は宮古以北の貝塚にそれぞれ、その立地や内容が類似するようである。

2．地形・地質と崎山遺跡群の立地（第2～4図）

崎山地区は、市街地の北方に位置し、太平洋上に三角形に張り出している。北は女遊戸から南は大沢までの範囲である。海岸線は入り組み、かつ急崖をなし岩礁が続く。砂浜は、中ノ浜・宿・日出島・大沢などに存在し、沢づたいの道を通ってこれらの浜辺に下ることができる。

ここで、地形分類および表層地質と遺跡群の立地について述べてみる。岩泉付近から宮古付近の太平洋海岸線に沿ってみられる丘陵は、小本（おもと）丘陵と呼ばれる。海岸線付近での標高は約90m、西側の山地寄りで約150mとほぼ平坦で、海に向かってゆるやかに低下している。この小本丘陵は、洪積世の海岸段丘が開析されて生じたもので、基盤は中生代に貫入した花崗岩（田老花崗岩体）およびこれによって圧砕され変質した安山岩質岩石（原地山層・中生代）や砂岩（中生代）などで構成される。しかし、段丘面の保存状態は極めて悪く、基盤岩が露出している地域が多い。崎山遺跡群は、この小本丘陵のほぼ南端に立地している。

小本丘陵

現在、崎山地区には27ヶ所の遺跡が確認されているが、いずれも縄文時代のものである。早期～晩期にわたるが、中でも前期～中期の遺跡が主体を占め、後～晩期のものは比較的少ない。

崎山遺跡群

遺跡の多くは、わずかに残った段丘面やこれに連続する緩斜面上に立地している。トロノ木Ⅰ遺跡、白石遺跡から大付遺跡。萩沢Ⅰ遺跡から古里Ⅰ遺跡、大崎山遺跡から姉ヶ崎遺跡、潮

第２図　崎山遺跡群と周辺の遺跡

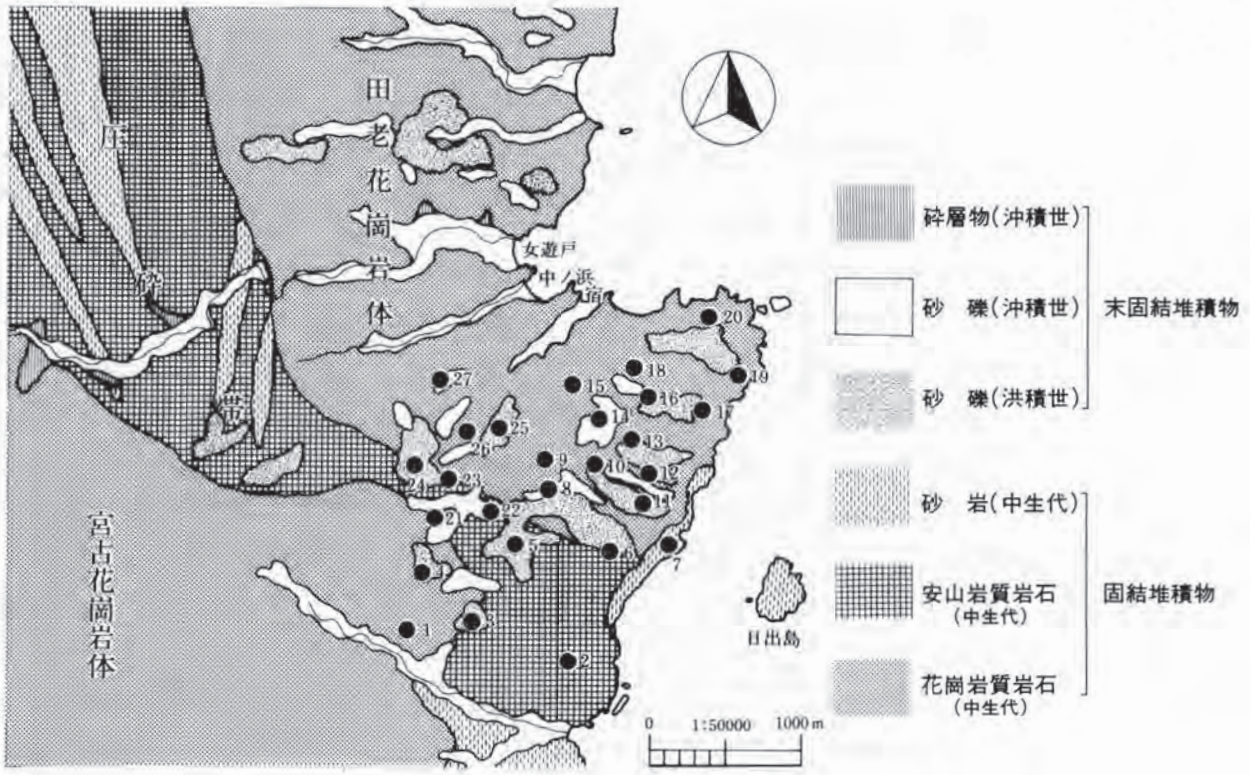
遺跡名	遺跡コード
1.大石遺跡	LG24－0057
2.長磯遺跡	－0177
3.塚場遺跡	－0142
4.下在家遺跡	－0018
5.白石遺跡	LG14－2195
6.大付遺跡(貝塚)	－2291
7.日出島遺跡	－2294
8.萩沢Ⅱ遺跡	－2157
9.萩沢Ⅰ遺跡	－2137
10.潮吹Ⅲ遺跡	－2230
11.わたのは遺跡	－2262
12.潮吹Ⅰ遺跡	－2253
13.潮吹Ⅱ遺跡	－2232
14.古里Ⅰ遺跡	－2119
15.古里Ⅱ遺跡	－1198
16.古里Ⅲ遺跡	－2203
17.古里Ⅳ遺跡	－2206
18.古里Ⅴ遺跡	－1282
19.大崎山遺跡	－1288
20.姉ヶ崎遺跡	－1247
21.崎山貝塚	－2079
22.千東長根遺跡	－2127
23.トロノ木Ⅱ遺跡	－2048
24.トロノ木Ⅰ遺跡	－2150
25.トロノ木Ⅲ遺跡	－2123
26.トロノ木Ⅳ遺跡	－2121
27.トロノ木Ⅴ遺跡	－2099

中起伏山地　　砂礫段丘Ⅰ

小起伏山地　　山麓および他の緩斜面　　P…谷底平野及び氾濫平野

丘陵地　　崖錐性扇状地　　D…人工改変地

第3図　地形分類図



第4図　表　層　地　質　図

吹Ⅰ・Ⅱ遺跡およびわたのは遺跡などがこれに相当し、比較的規模の大きいものが多い。その他のものは、トロノ木Ⅲ・Ⅵ遺跡などのようにさらに開析の進んだ狭い尾根上に立地するが、比較的小規模のものが多い。崎山貝塚は、小さな沢によって開析された谷底平野（低湿地）へ張り出した舌状台地上に立地し、前二者とは全く景観を異にする。

以上のように概観した上で、さらに年代を追って遺跡の立地をみると、海岸線に近い地域は大付遺跡・わたのは遺跡・大崎山遺跡・古里Ⅵ遺跡などの後・晩期の遺跡が存在し、海岸線から比較的離れた地域には早期～中期のものが多いことが確認されている（『分布調査　1』）。これは非常に興味深いことであり、遺跡群内の比較的大規模な遺跡だけをひろって見ると、崎山貝塚（早期～中期中葉）→白石遺跡（中期末葉～後期初頭？）→わたのは遺跡（後期）→大付遺跡（後期～晩期）の動きが想定され、内陸部から沿岸部への移行が見てとれる。同時にこれは、遺跡数の減少を伴うようであり大付遺跡の終末を以って崎山地区における縄文時代の遺跡はなくなってしまう。

また、例えば崎山貝塚から海岸線に至る直線距離（約2㎞）を半径として生活圏（最低限の行動範囲としての）を設定すれば、崎山地区の大半が入ってしまう。この中で個々の遺跡がどのように結びついて地域社会を構成し、それがどのように変遷してゆくのかを探るのが今後の課題となる。

続く弥生時代～奈良・平安時代の遺跡は、遺跡群内には認められない。これは、宮古以北の小本丘陵上に立地する遺跡群に共通する状況のようである。（16ページ下段に続く）

Ⅲ　調査内容

1．白石遺跡第１次調査

(1)　遺構の検出状況（第６・７図）

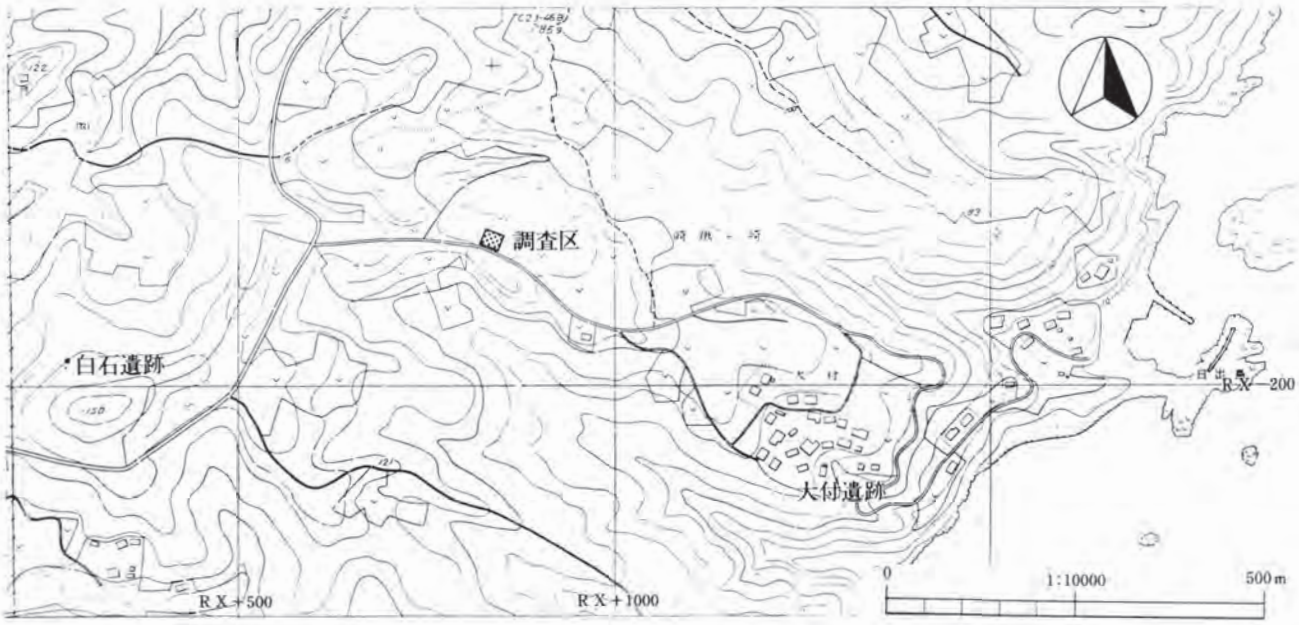
白石遺跡は宮古市の遺跡コードＬＧ14－2195、岩手県のコードＬＧ04－2194として登録された周知の遺跡である。本年度の調査は個人住宅の建築に先だつ緊急発掘調査である。調査区は遺跡の東端部に位置する。

発掘調査は住宅建築により破壊される範囲の全域を対象としたが、南半部に検出した遺物包含層は大半を庭園として現状保存することとし、トレンチによる層相の観察および遺物の採集のみにとどめた。基本層序はⅠ層が表土および旧表土。Ⅱ層は暗褐色土を基本土とし江戸時代の遺物を含む。Ⅲ層は黒褐色土で遺物は少ない。Ⅳ層はやや暗い褐色土を基本土とし縄文土器片を含む。Ⅴ層は明るい褐色土を基本土とし縄文土器片を含む。各層とも粘質で固く、Ⅳ層～Ⅴ層は炭化物の粒子を含む。また、Ⅱ層～Ⅴ層は南半部の谷状部分にのみ堆積する。

検出した遺構は調査区北東部に集中するピット群である。いずれもⅠ層直下の地山面で検出した。断面形は浅い擂鉢状で、埋土には炭化物や土器片を含むが図示できたのはP_2のみである。

(2)　出土遺物（第７図）

１～４、11はⅢ層、５～７、16はⅣ層、９はP_2、18はⅡ層、他のものはⅠ層から出土したものである。１、２はＳ字状連鎖沈文を施すもの。４、８は羽状縄文を施すもの。７は縄文－縄文土器か？、９は繊維を含まない深鉢である。12はミニチュア土器。10、11は砂岩質の砥石、13は一方の側縁にノッチ状の刃部をもつ石匙。14、15は削器。16は石錐。17は小皿、18はぬりわけの碗。19、20は寛永通宝である。



第５図　白石遺跡第１次調査区周辺地形図

第６図　白石遺跡第１次調査区全体図

第７図　白石遺跡第Ⅰ次調査土層断面図・出土遺物　(Scale 1～11・1:3、12～20・2:3)

2．崎山貝塚第１次調査

(1) 遺跡の現況（第８図）

崎山貝塚は、宮古市のコードＬＧ14－2079、岩手県のコードＬＧ04－2180として登録されている。貝塚は、北、東、南の三方を低湿地により囲まれた舌状台地上に位置する。台地の基部は国道45号線により削平され、また工場用地として埋立てられているが、主体部分の保存状態は良好で、畑や荒地として保存されている。大正13年、柴田、小田島らにより貝塚と確認されて以来多くの自然遺物が採集されてはいるが、貝、獣骨などの自然遺物を包含する層のあり方が全く不明であった。

昭和60年４～５月に南斜面の西端部で宅地造成に伴う緊急調査が行われ、大木8b式期を主体とする遺物包含層が検出された。自然遺物は共伴しないとのことであるが(註１)、ふるいわけを行っていないため不明と言わざるを得ない。

(2) 調査の方法

範囲確認調査の初年度である本年度は遺跡周辺の1/1000の地形図作成および調査用基準点の設置を行った。また、発掘調査は南側斜面における貝層、自然遺物包含層の有無とその堆積状況の確認および斜面下端部の様相（特に低湿地との関係）の確認を目的として行われた。

発掘調査は南側斜面東半部（ＲＸ－17～－48付近、ＲＹ＋120～＋153付近）に等高線と直交するトレンチを設定し、トレンチ南端部から２ｍ毎に区切り、南から№１グリッド～№22グリッドとした。トレンチ内の表土、旧表土を剥ぎ、遺構の有無を確認した後、№１グリッド～№３グリッドと№15グリッド～№22グリッドを幅１ｍで掘り下げて土層の堆積状況を観察した。

(3) 基本層序（第９、10図）

幅１ｍのサブトレンチをほぼ完掘できたのは№１～３グリッドと№15～22グリッドのみであり、各々の層位を対応させることができなかったので、各地点ごとに層名を使いわけた。

遺物包含層

№１～３グリッドは、トレンチの下端部でＩ層が表土および旧表土。２層は暗褐色粘質土を基本土とし褐色～黄褐色粘質土を多く含む。３層は暗褐色～褐色土のやや粘性のあるシルト質土を基本土とする。全体に混入土は少ないが、３ａ、ｂ層は金雲母を多く含む。3b層下面でだ円形の小ピットＰ－１を検出している。４層は暗褐色～褐色の粘質土を基本土とするが、混入土はさらに少なくなる。全体に炭化物粒を多く含むが特に4a層と4c層に多い。なお4a層から獣骨片が出土している。５層は黒褐色土を基本土とする。全体にややシルト質となる。６層は褐色粘質土層で漸移層である。７層は地山であるが固くしまった粘土層である。２～４層は遺物を多く含むが５層になると少なくなり６層に至って皆無となる。なお、これらの遺物包含層は水田面下（低湿地）へゆるやかにもぐり込んで行く。

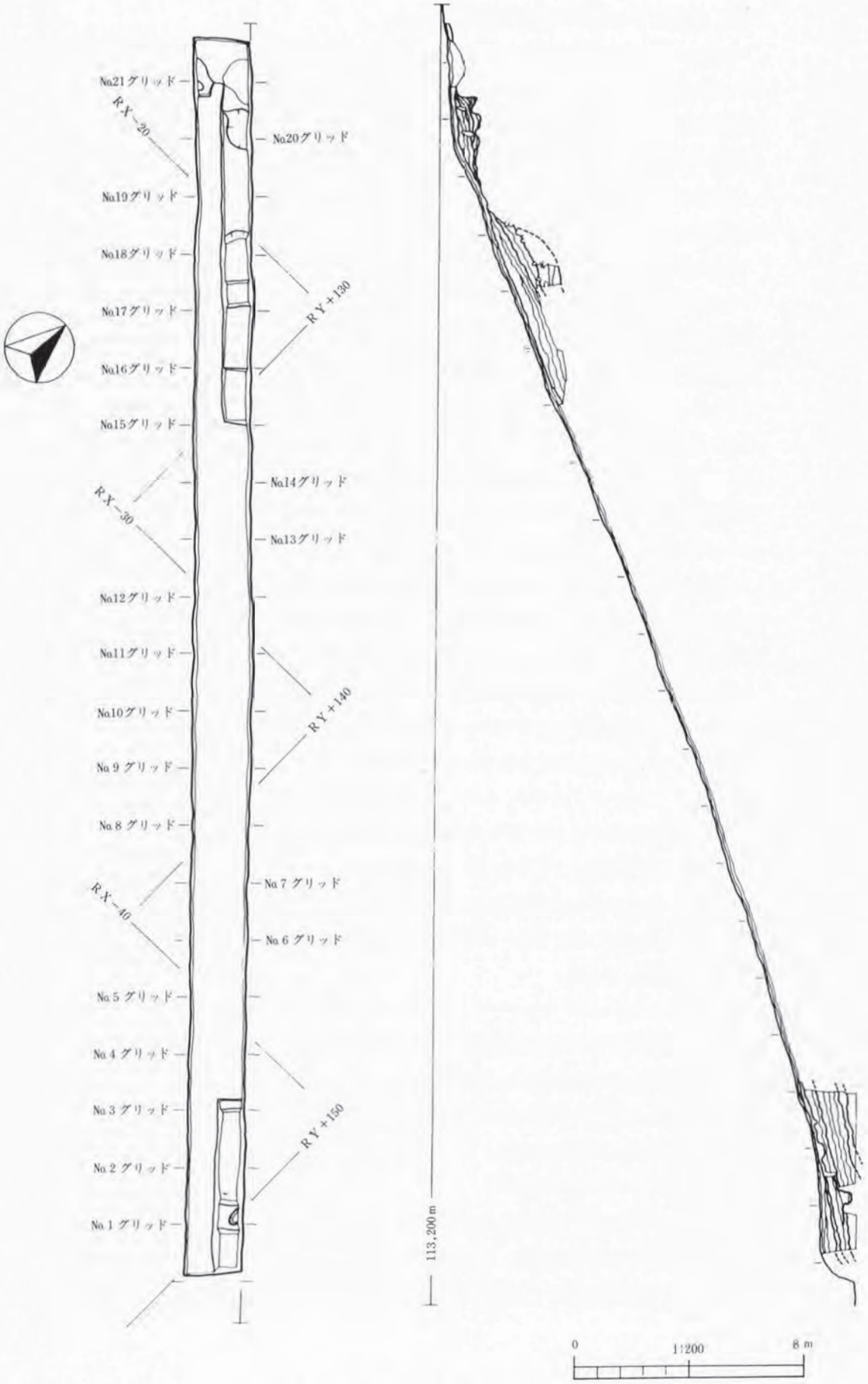
№15～19グリッドは№20～21グリッドに比較的類似した堆積状況を呈するが、後述するように遺物（土器型式）はこれと対応しない。

遺物包含層

１層は表土および旧表土。II層は暗褐色～褐色粘質土を基本土とし、炭化物粒を多く含む。

（註１） 昭和60年度に調査を行った担当者（上野猛）より。

第8図　崎山貝塚周辺地形図



第9図　崎山貝塚第Ⅰ次調査区全体図

非常に固くしまっている。Ⅲ層はややシルト質の褐色土を基本土とし少量の炭化物粒を含む。Ⅱ層、Ⅲ層ともに多量の遺物を包含している。

Ⅳ層はシルト質土を基本土とする。Ⅳａ層はやや暗い褐色土を基本土とし、角礫を多く含む。Ⅳｂ層は最も明るい層である。Ⅳｃ層はやや暗い褐色土を基本土とするがⅣａ層に比べてやや粘性がある。Ⅳｃ層の最下面から貝ブロックを検出しており、貝ブロックＣと呼称した。これは破砕されたイガイを主体とし、タイ、カサゴ類、カツオなどの自然遺物を含む。

貝ブロック

Ⅱ層～Ⅳ層上部は自然遺物を検出できなかったが、ふるい分けを行っていないので微細なものに関しては含まれていた可能性もある。

№20～22グリッドはトレンチの上端部であるが、耕作のために削平されており特に№22グリッドは表土の直下が地山となっている。Ⅰ層は表土および旧表土。ⅱ層は褐色粘質土を基本土とし炭化物粒を多く含む。ⅱｃ層は自然遺物を多く含む層でシカ、イノシシ、鰭脚類？などの獣骨やカツオ、ブリの魚骨などを検出している。またⅱａ.ｂ層中からも少量ではあるがシカ、イノシシ、カツオなどの獣、魚骨を検出している。ⅲ層はⅱ層より明るい褐色土を基本土とするが、粘性は少なくややシルト質である。やはり炭化物粒を多く含む。ⅲａ層はⅲ層中最も明るくややシルト質であるが遺物をほとんど含まない。ⅲｂ層はやや暗い褐色土を基本土とし、炭化物粒を多く含む。この層も自然遺物を多く含む層で、人骨をはじめシカ、タヌキ、イヌ、カツオなどの獣、魚骨を検出している。ⅲｃ層は地山の崩壊した層で部分的に堆積する。

自然遺物層

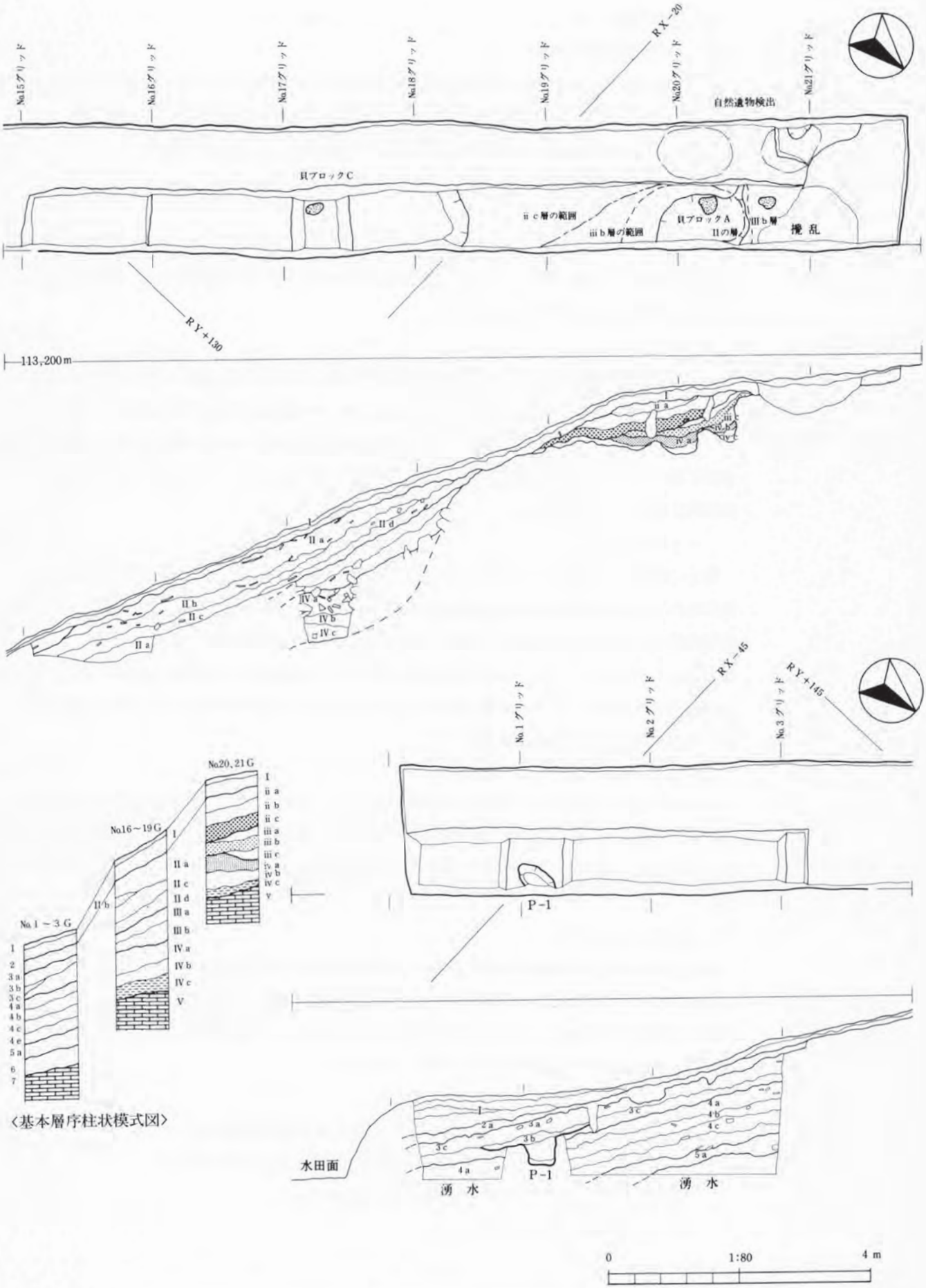
ⅳ層は明るい褐色のシルト質土を基本土とする。ⅳａ層は炭化物粒を含むが、やはりシカなどの獣骨を検出している。ⅳｂ層はシルト～砂質土を基本土とする。土器や礫などを多く含むが自然遺物は認められない。ⅳｃ層は続くｖ層（地山）上面の凹部にのみ堆積する層である。シルトを基本土とし、下面に水成堆積様のきめの細かいシルト～粘土層が薄く堆積する。この層にはイガイを主体とした貝ブロックを２ケ所検出し、貝ブロックＡ、貝ブロックＢと呼称した。貝ブロックＡは破砕されたイガイを主体とするブロックで、他にフジツボ科の一種、ムラサキウニ、アイナメ、マグロ、シカなどの自然遺物を含む。また種の同定はできなかったが魚の棘を多く含んでいる。貝ブロックＢもやはり破砕されたイガイを主体とするブロックで、魚の棘を含むが種の同定はできなかった。ｖ層は地山であるが、基盤岩が風化しシルト～砂質となっている。凹凸が著しく断面北端の立ち上がりなどは人為的かとも思われたが調査の結果自然地形であると判断した。また、サブトレンチ外に粉砕された貝殻や獣骨片などを含むブロックを２ケ所検出している。

貝ブロック

（7ページより続く）

これらの遺跡の大半は縄文時代晩期までに終末を迎え、弥生時代には痕跡的となり、古墳時代～平安時代には皆無に等しい状態となる。これは、閉伊川流域、津軽石川流域および宮古湾沿地域において奈良・平安時代の遺跡数が激増し、活発化するのと好対照をなす。例えば、基盤の原地山層などの風化が進み、粘土化し水稲栽培などの農耕に適さない土壌となっていることにも一因があるかと思われる。

中世には「崎山館」が存在したと言われ、「館ヶ森」や「館ヶ下」などの地名や屋号が伝わる。崎山貝塚の北の尾根には、郭や帯郭らしき遺構が部分的に存在する。近世に伴うものは、トロノ木Ⅰ遺跡で昭和59・60年度に掘立柱建物跡と井戸跡を検出している（未報告）。



第10図　崎山貝塚第1次調査　No.1〜No.4グリット
No.15〜No.22グリット

(4) 出土遺物

㌔) 土器（第11～21図）

前述したようにトレンチ内の３地点での土層の対応ができていないので、地点毎に記述することにする。なお、挿図は基本的には同一層中で新しいものから古いものへと大まかに分類しているが、このうち最も新しい型式がその層位の時期を決定する資料と理解した。

No.１～３グリッド（第11～14図）

５ａ層（１～11）

口縁部の外傾する深鉢である。体部は単節斜縄文を横方向に回転する。口唇部にだ円形の圧痕を有するものとそうでないものの２種がある。胎土にはいずれも繊維を含む。大木１式もしくはその前型式に相当すると思われる。

４ｄ層（12～31）

いずれも胎土に繊維を含む。12は口縁部の外反する深鉢であり口唇部とその下位に刻目を有する。ほぼ大木２式に相当するものと思われる。13～17・29は口縁部に不整撚糸文を施すもので、大木１式を主体とするが一部大木２式を含むかもしれない。20・21は結束のない羽状縄文を施すもの。18・19は横回転の単節斜縄文を施すものである。これらは大木１式もしくはその前型式に相当すると思われる。

４ｃ層（32～63）

胎土に繊維を含むものとそうでないものの２種がある。32～34は円形の刺突文（竹管文）を施すもので大木３式に相当すると思われる。35・36・41は口唇部に刻目を有するもの。さらに、網目状撚糸文を施すもの（37）や横位Ｓ字状連鎖沈文を施すもの（39）や器面全体に不整撚糸文を施すもの（40）などは、ほぼ大木２式に相当すると思われる。口縁部付近にのみ不整撚糸文を施すもの（44・45）や羽状縄文を施すもの（48）およびこれ以外のものもほぼ大木１式あるいはこの前型式に含まれると思われる。

４ｂ層（64～83）

64・65・67は平行沈線文（竹管文）を施すもの、67・68は刻目を有する隆線を施すもので大木３式に相当する。他のものはこれ以前の型式に伴うものであるが、69は器面全体に不整撚糸文を施すもの（大木２式か）で、74は複節の羽状縄文を施す尖底深鉢（大木１式以前か）である。

４ａ層（84～105）

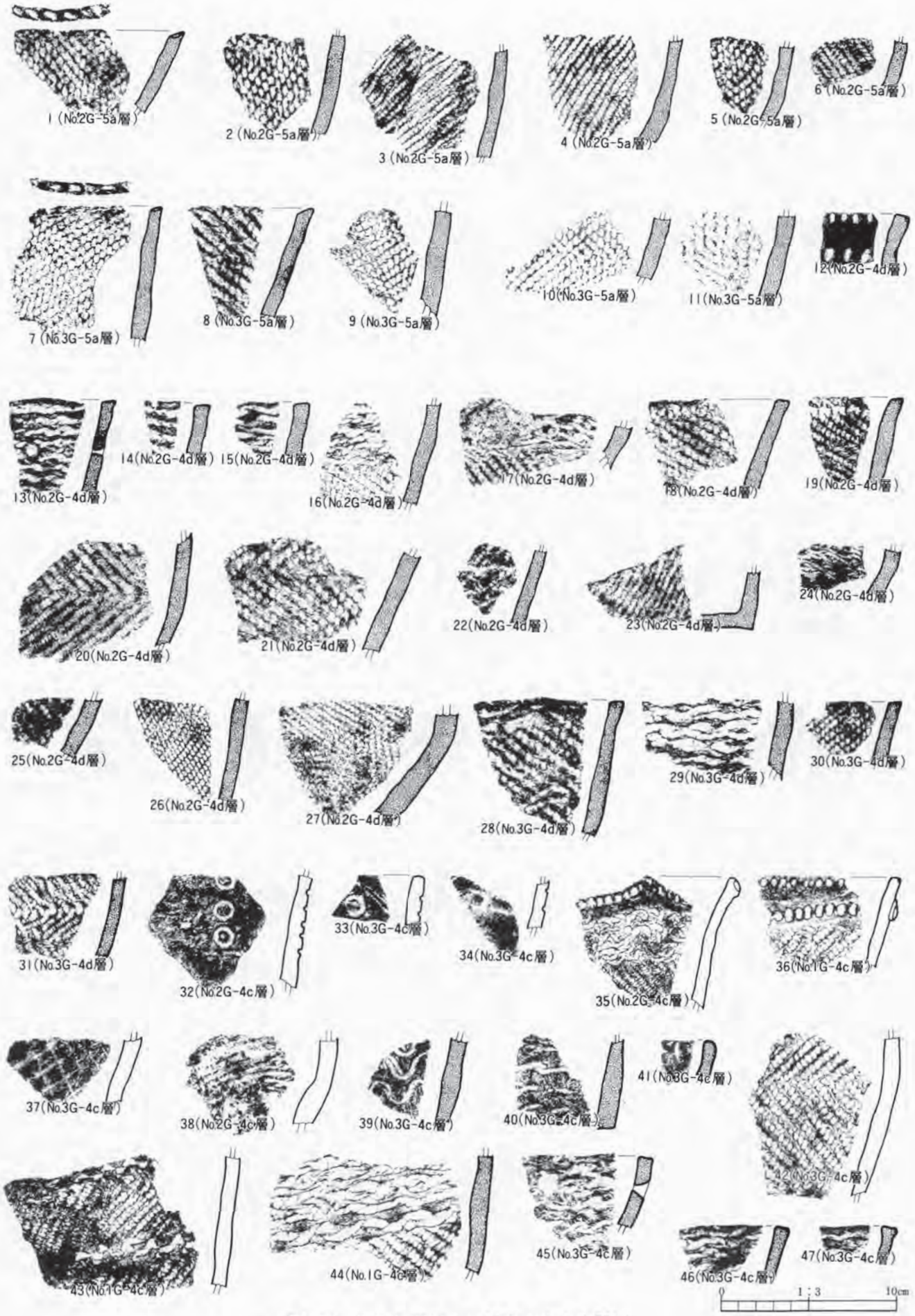
84は幅の広い沈線で鋸歯状文を施すもの、85は刻目のない隆線を貼り付けるもので大木４式に相当する。88は沈線による施文でやはり大木４式に相当するものか。95は大木３式に伴うもので、他の繊維を含まない地文のみのものもおよそ大木３～４式に伴うものが主体であると思われる。他のものはこれ以前の型式に伴うものである。

３ｃ層（106～107）

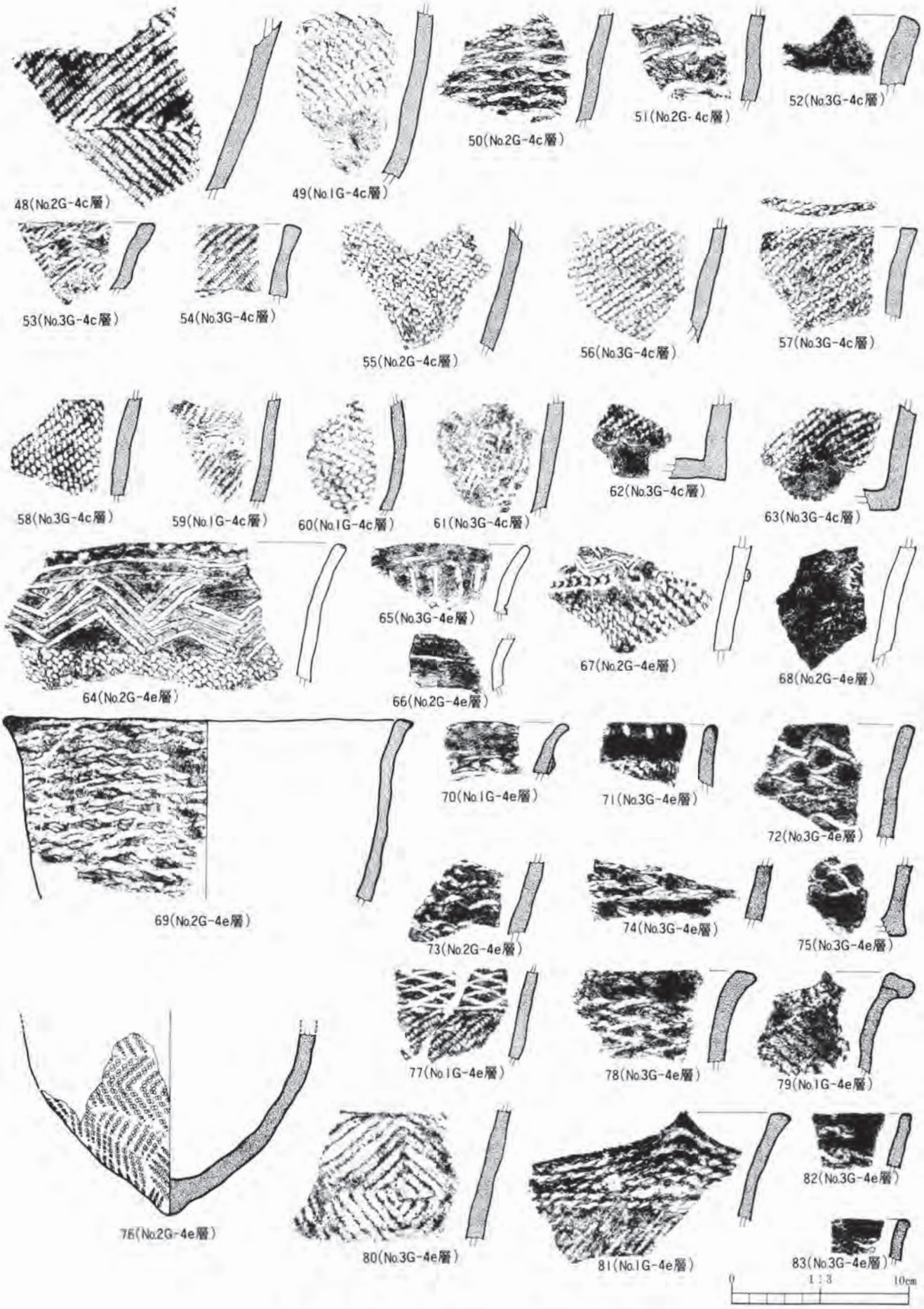
106は隆線により渦巻文や鋸歯状文を施すもので大木４式に相当する。107～109はほぼ大木３～４式に伴うと思われる。これ以外は以前の型式に伴うものと思われる。

３ｂ層はほとんど遺物を含まず、図示できるものはない。

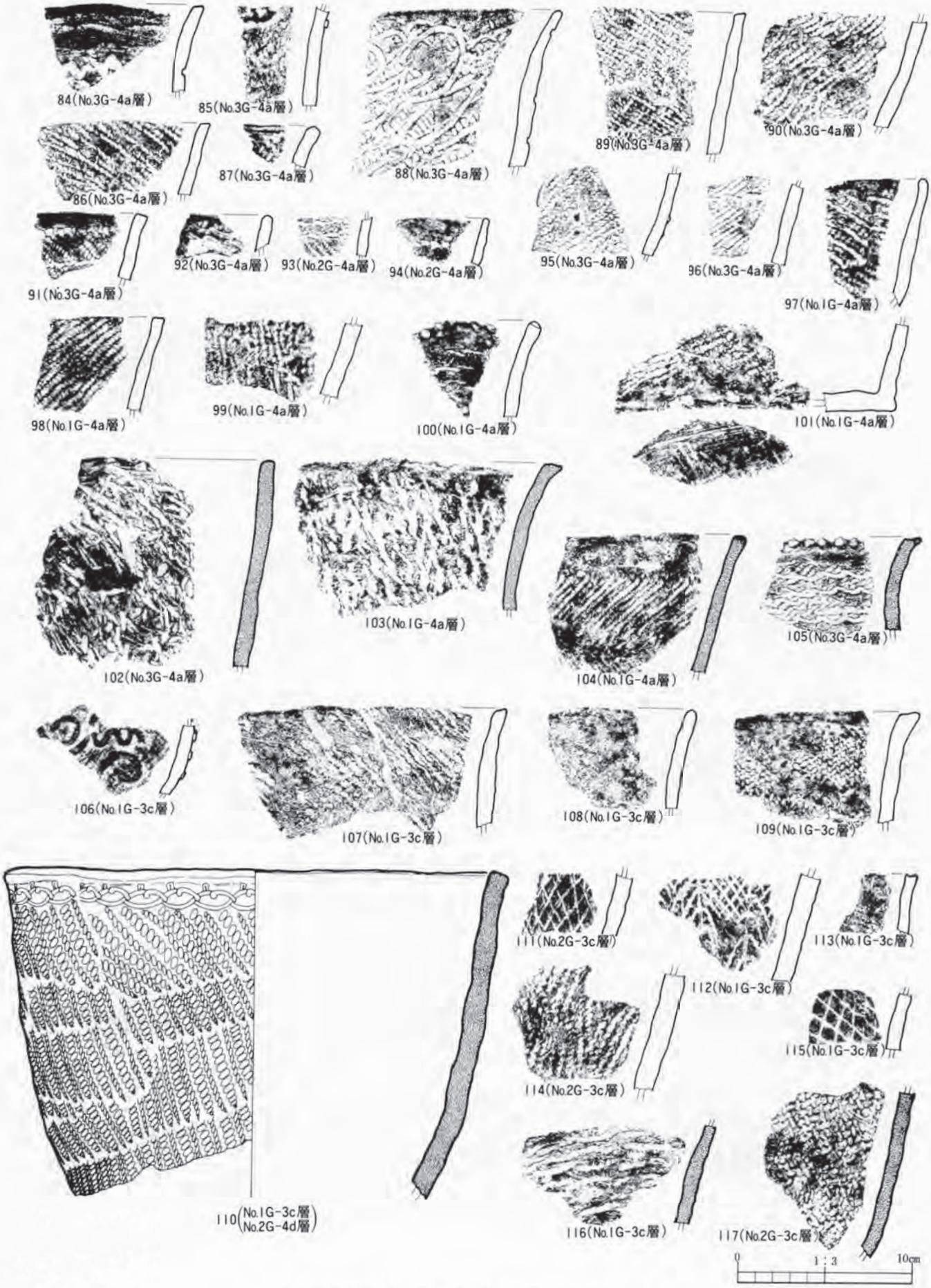
３ａ層（118～136・142・147・362）



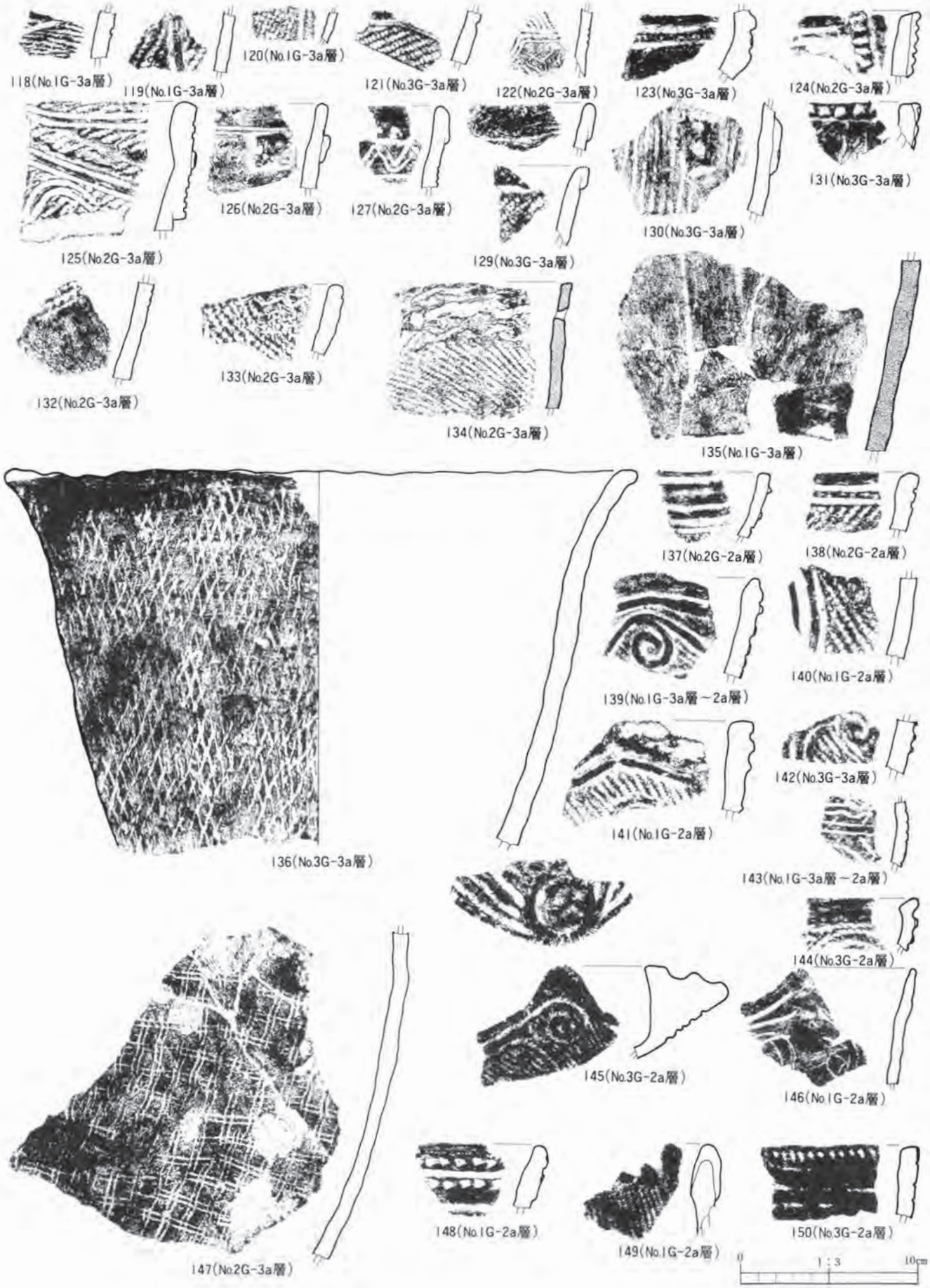
第11図　崎山貝塚第1次調査・出土土器(1)



第12図　崎山貝塚第1次調査・出土土器(2)



第13図　崎山貝塚第1次調査・出土土器(3)



第14図　崎山貝塚第1次調査出出土土器(4)

118～122・123は沈線・隆沈線などで施文され、大木８ｂ式に相当する。124～126は大木７ａ式に相当するが、他のものもこれ以前の型式に伴う。

２ａ層（137・138・140・141・144・148～150・315～321）

137・138・140・141・315～321は沈線・隆沈線などにより渦巻文や懸垂文を施すもので大木８ｂ式に相当する。他のものはこれ以前の型式に伴う。

３ａ～２ａ層としたもの（139・143・146）も大木８ｂ式に相当するものが主体を占める。

No.16～19グリッド（第15～17図）

貝ブロックＣ（153・154）

Ⅳｃ層の最下面に形成された貝ブロックＣに伴うものであるが、いずれも繊維を含む。

Ⅳｃ層（151・152・155）

151は尖底部、152は羽状縄文を施すもので大木１式もしくはそれ以前の型式に相当するものである。

Ⅳｂ層は遺物の量が少なく図示できるものはない。

Ⅳａ層（156～173）

口縁部のわずかに外反する深鉢で、尖底を呈すると思われる。いずれも地文のみの施文であるが、171・173は口唇部にも施文が見られる。大木１式もしくはそれ以前の型式に相当するものである。

Ⅲａ層（174～178・218）

いずれも地文のみであるが大木１式もしくはそれ以前の型式に相当する。

Ⅱｄ層（179）

179は口縁のわずかに外反する深鉢で、口唇部はだ円形の押圧を連続して施すことにより小波状を呈する。体部は単節斜縄文を横回転で施す。大木１式もしくはそれ以前の型式に相当する。

Ⅱｃ層（180・181・183～188・234）

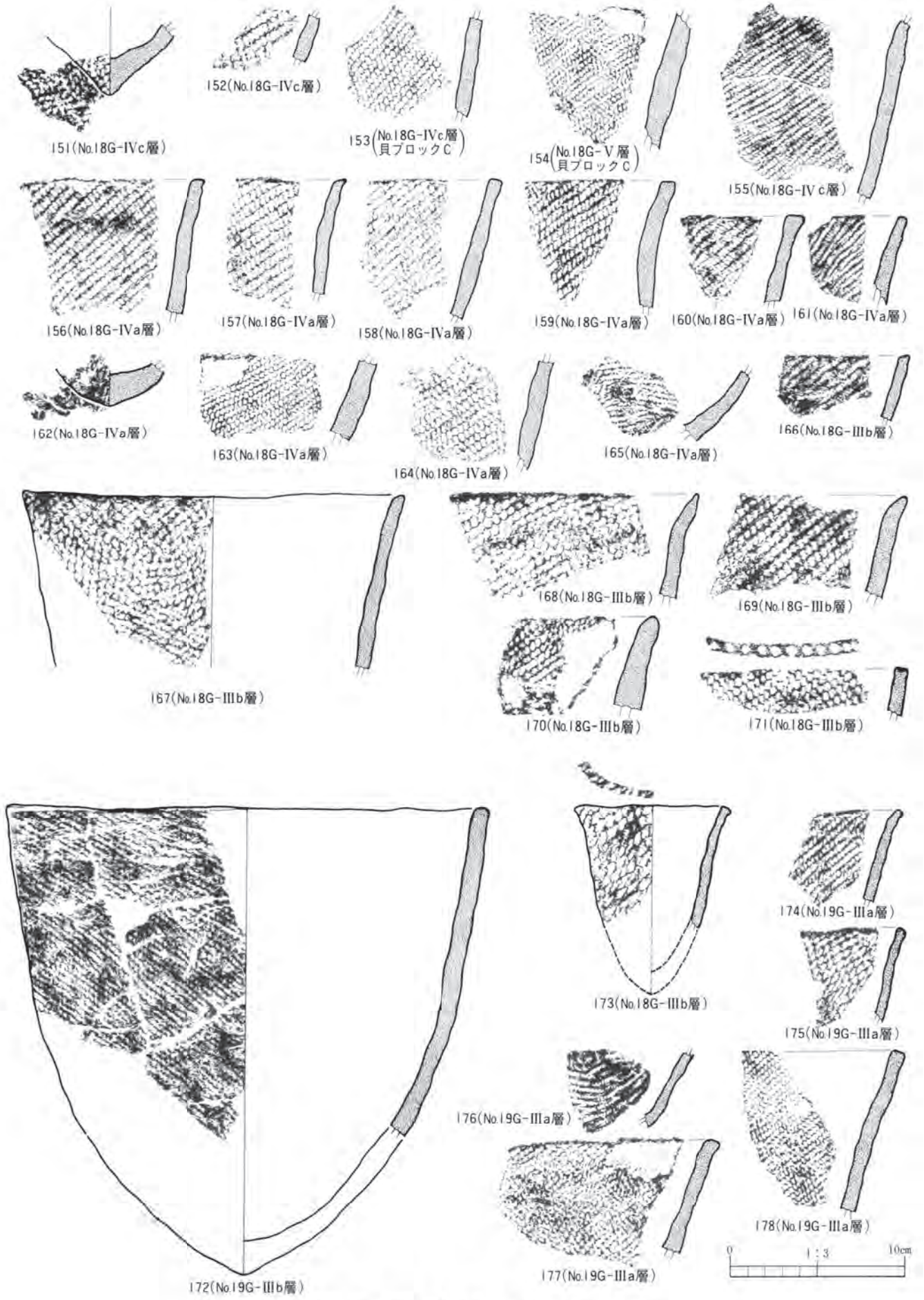
180・181・184・234は口縁部に不整撚糸文を施す。181は大波口縁を呈し、体部に羽状縄文を施す。これらは大木１式に相当する。187・188は押引き沈線で施文するものであり、大木１式より古い型式に伴う。

Ⅱｂ層（182・189～206・358・359）

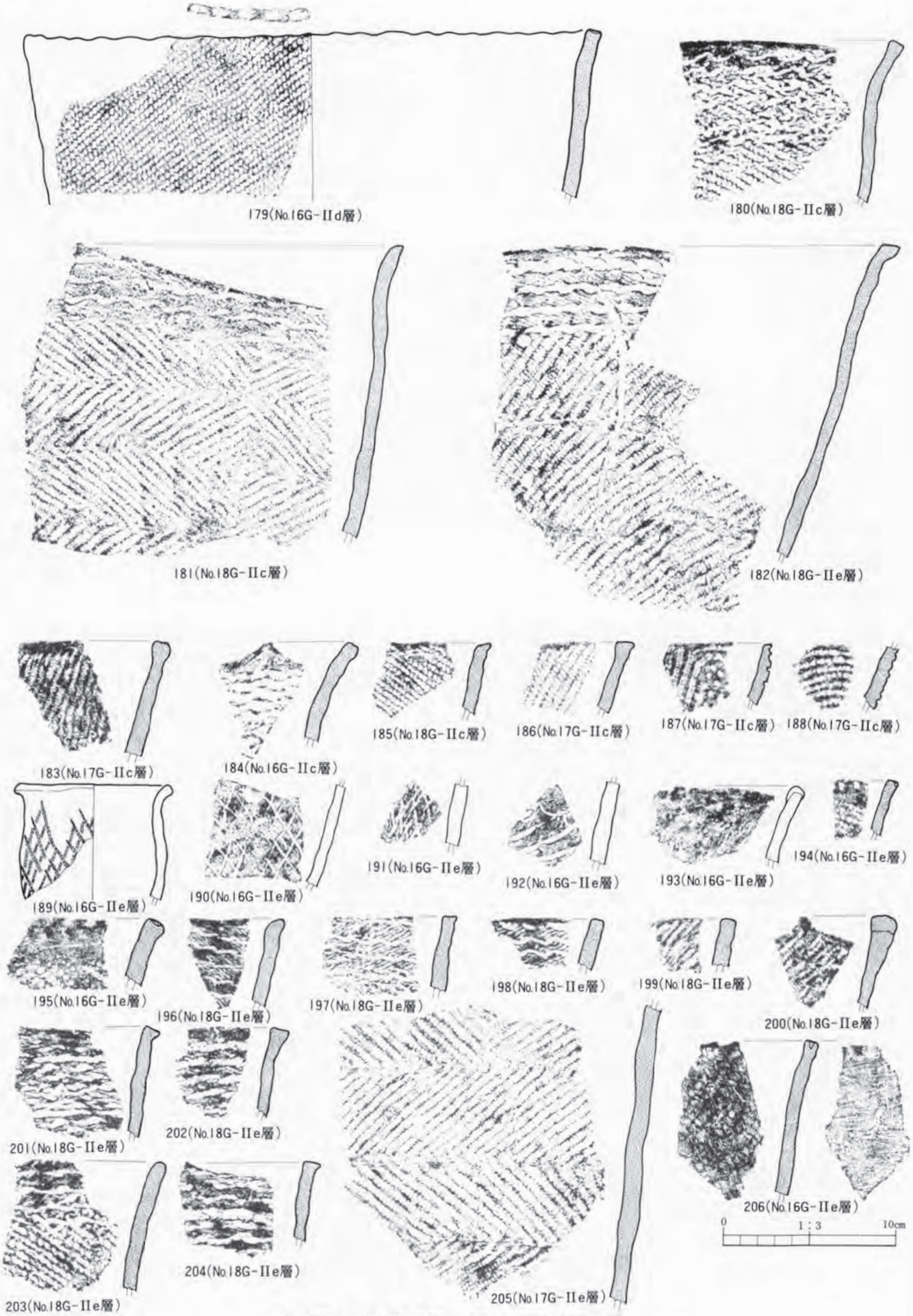
189・190は網目状撚糸文を施すが、胎土に繊維を含まない。194・195は口唇部に刻目を施す。196～198は綾絡文を施す。いずれも大木２式に相当する。他のものはこれ以前の型式に伴うが、206は縄文一条痕文糸の土器かと思われる。

Ⅱａ層（207～217・219～233・235～238）

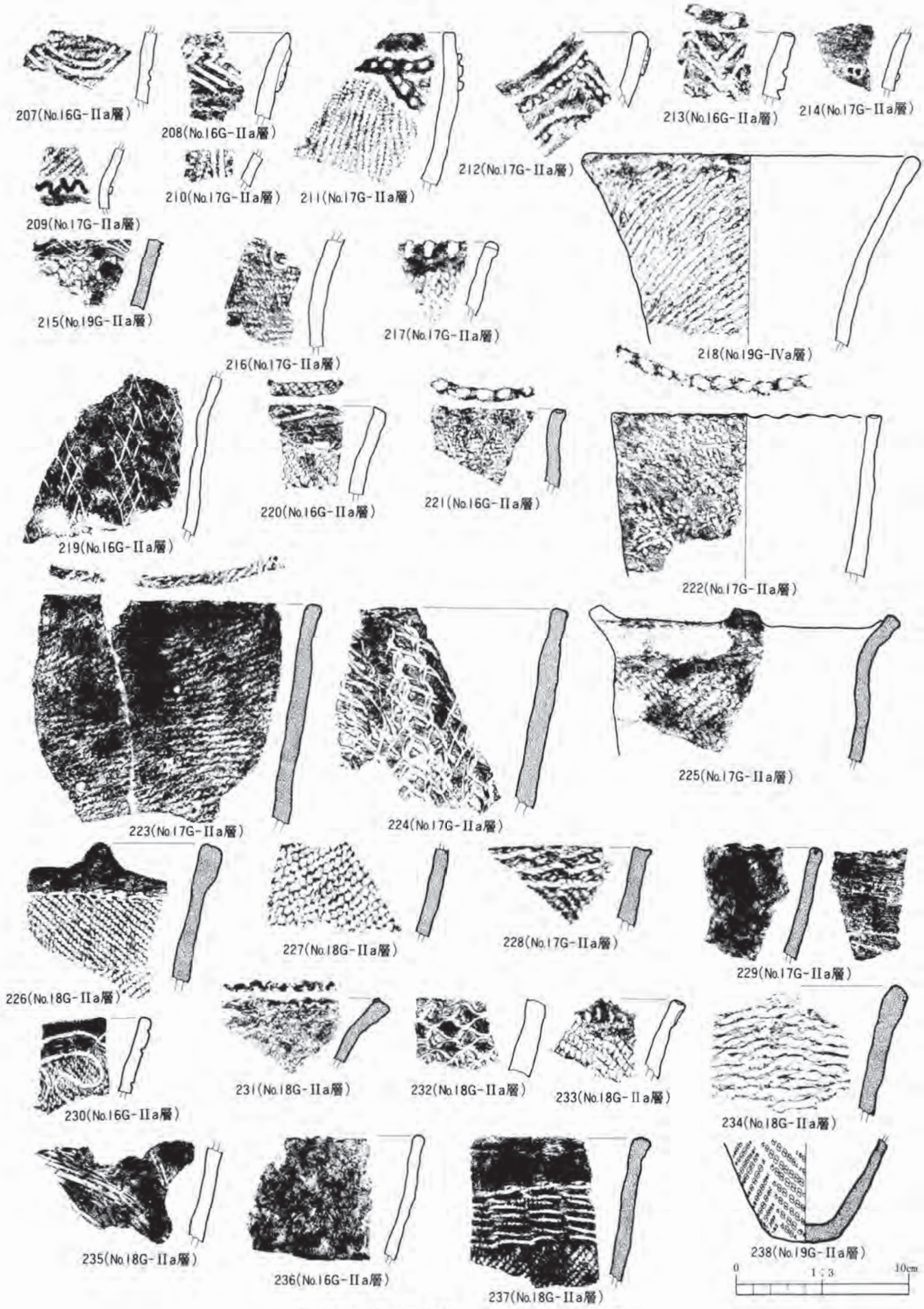
207・210は沈線により施文され、大木８ｂ式に相当する。208は矢羽根状の沈線を施すもので大木７ａ式に相当するものか。211・212は円形の刺突を伴う隆帯を施すが大木５式に相当する。209は隆線による連続山形文を施し大木４式に相当する。214は刻目を有する隆線を施し、215は沈線による連続山形文（竹管文）を施すもので大木３式に相当する。他のものはこれ以前の型式に伴うが、218は丸底風の深鉢で複節斜縄文を施し大木１式より古い型式に相当する。



第15図　崎山貝塚第１次調査・出土土器(5)



第16図　崎山貝塚第Ⅰ次調査・出土土器(6)



第17図　崎山貝塚第1次調査・出土土器(7)

№20～21グリッド（第18～20図）

貝ブロックA（239）

ⅳｃ層下面の貝ブロックAに伴う。239は繊維を含む深鉢で羽状縄文を施す。大木１式に相当するものか。

ⅳｃ層（240）

綾絡文を伴う羽状縄文を施す。大木１式に相当するものか。

ⅳｂ層（241～247・249）

241・242は胎土に繊維を含まず、口唇部に刻目を有する。243は横位Ｓ字状連鎖沈文を施す。いずれも大木２式に相当する。他のものはこれ以前の型式に伴う。

ⅳａ層（248・250～257・302）

252は端部に細かい撚りの原体を巻きつけた単節斜縄文Ｒ－ＬとＬ－Ｒを回転させ羽状に施した後、Ｓ字状連鎖沈文的な撚りのない不整撚糸文を施す。248はＳ字状連鎖沈文を施す。これらは大木２式に相当する。250は沈線により山形文（竹管文）を施し、大木２式あるいは大木３式に相当する。254・256・302は口縁部に不整撚糸文を施し大木１式に相当する。255・256は大木１式もしくはそれ以前の型式に伴うものである。

ⅲｃ層は地山ブロック（間層）で遺物を含まない。

ⅲｂ層（258～272）

258・265は沈線により山形文（竹管文）などを施す。259は口縁部に刻目のある隆線を施す。これらは大木３式に相当するが、他のものはこれより古い型式に伴う。

ⅲａ層（273～277）

この層も間層で遺物は少ない。273は沈線による山形文（竹管文）を施し大木３式に相当するが、他のものはこれ以前の型式に伴う。

ⅱｃ層（278～281・286～292・346）

278・279は刻目を有する隆線を施す。280は沈線により山形文（竹管文）などを施す。これらは大木３式に相当するが、他のものはこれ以前の型式に伴う。

ⅱｂ層（282～285）

小片であるため判然としないが、やはり大木３式以前に相当するものかと思われる。

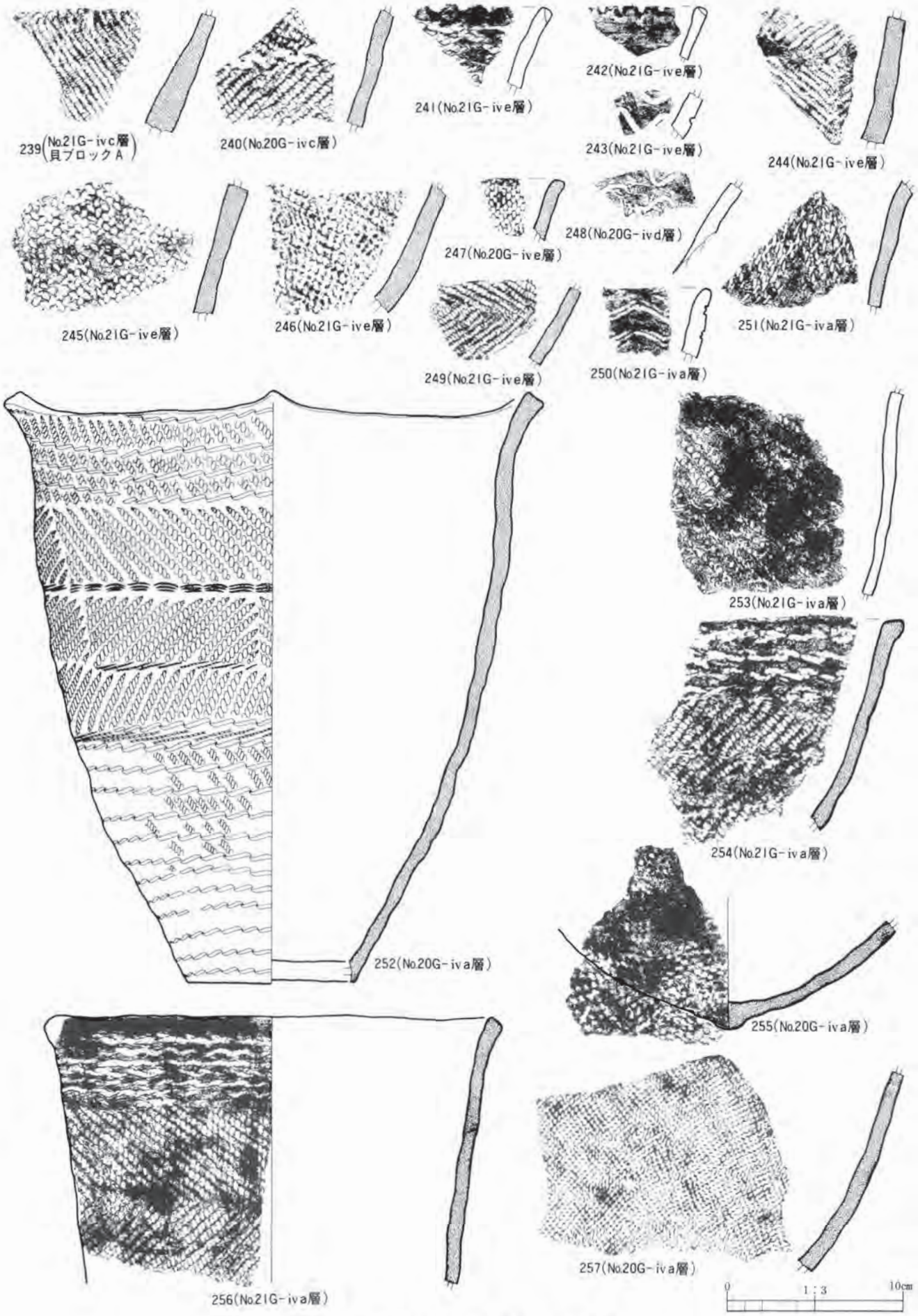
ⅱａ層（293～301）

293～296は沈線により山形文（竹管文）を施し大木３式に相当するが、他のものはこれ以前の型式に伴う。

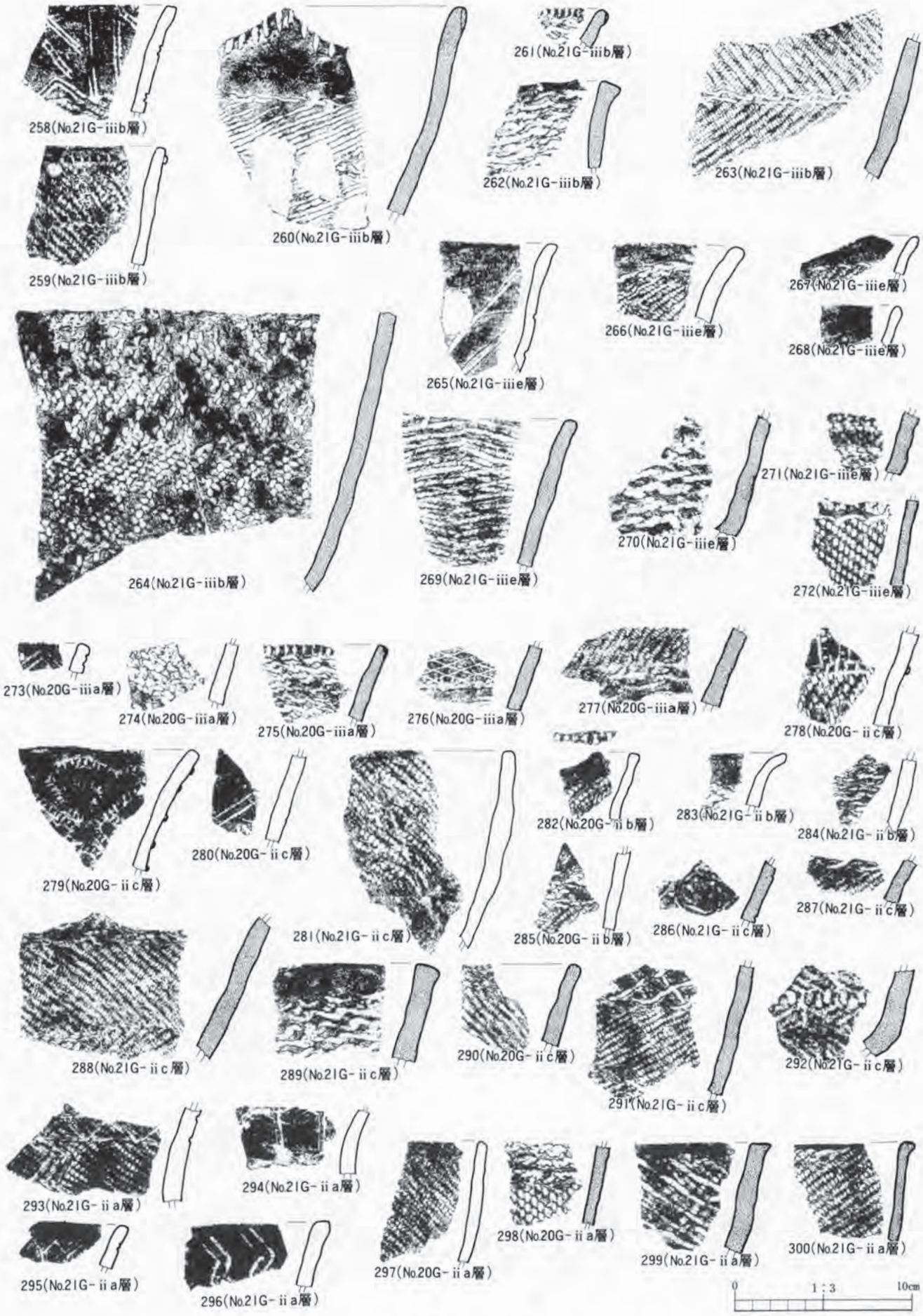
〈表土など〉（303～314・322～343・345・347～352・355～357・363・364）

304～314は隆沈線や沈線などで施文されるもので大木８ｂ式に相当する。322～325は原体圧痕文を施し大木７ｂ～８ａ式に相当する。303・326～333・339は口縁部を折り返すものや竹管文を施すもので大木７ａ式に相当する。335～338は隆帯状に円形の押捺を連続させるもので、前期末～中期初頭に伴うものか。341・342は沈線による連続山形文を施し大木３～４式に相当する。343～347は大木３式に相当する。他のものはこれ以前の型式に伴う。

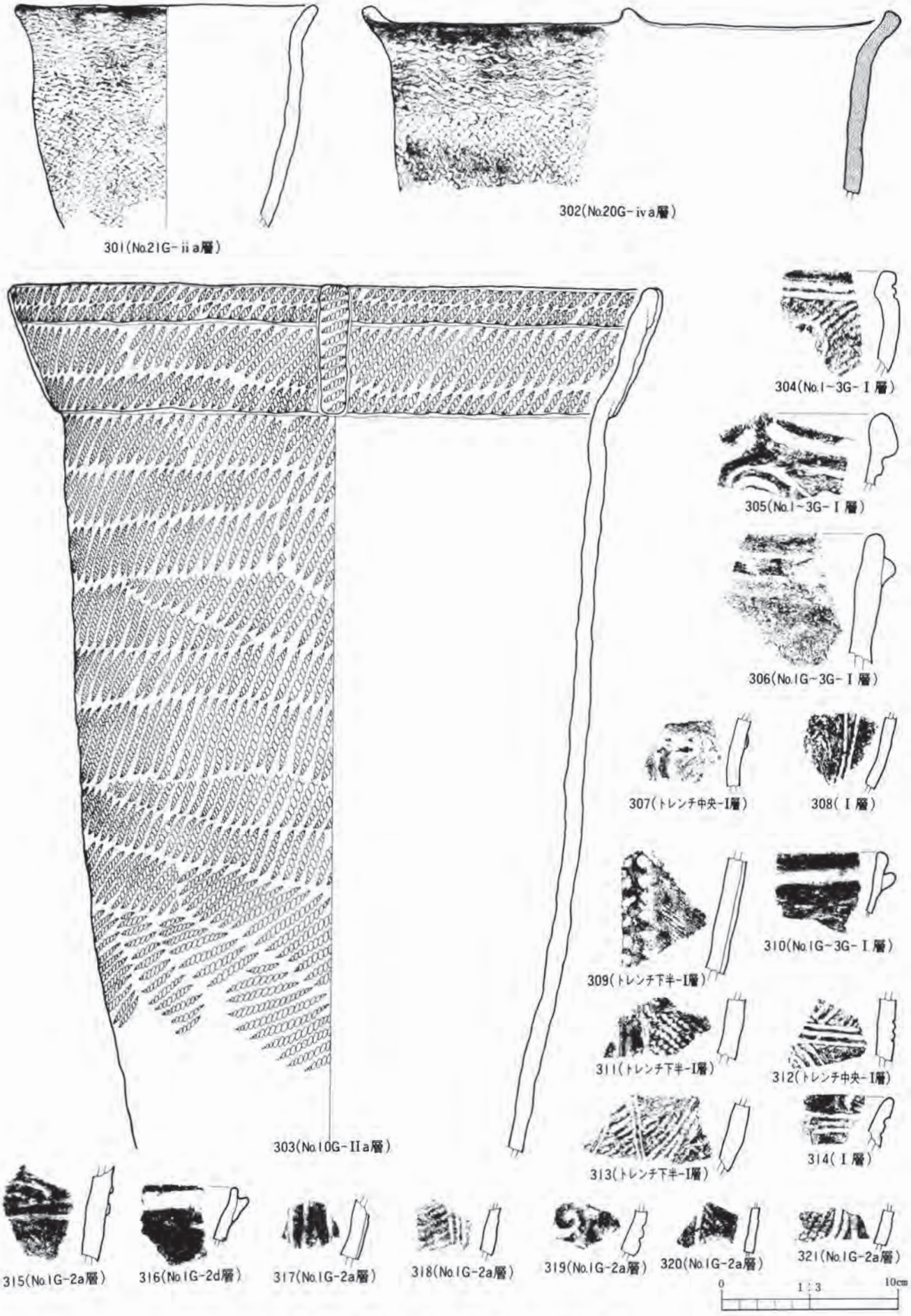
（参考文献）　興野　義一　「大木式土器理解のためにⅠ～Ⅵ」『考古学ジャーナル13、16、18、24、32、48』1967～1970
熊谷　常正　「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」『岩手県立博物館研究報告第Ⅰ号』1983



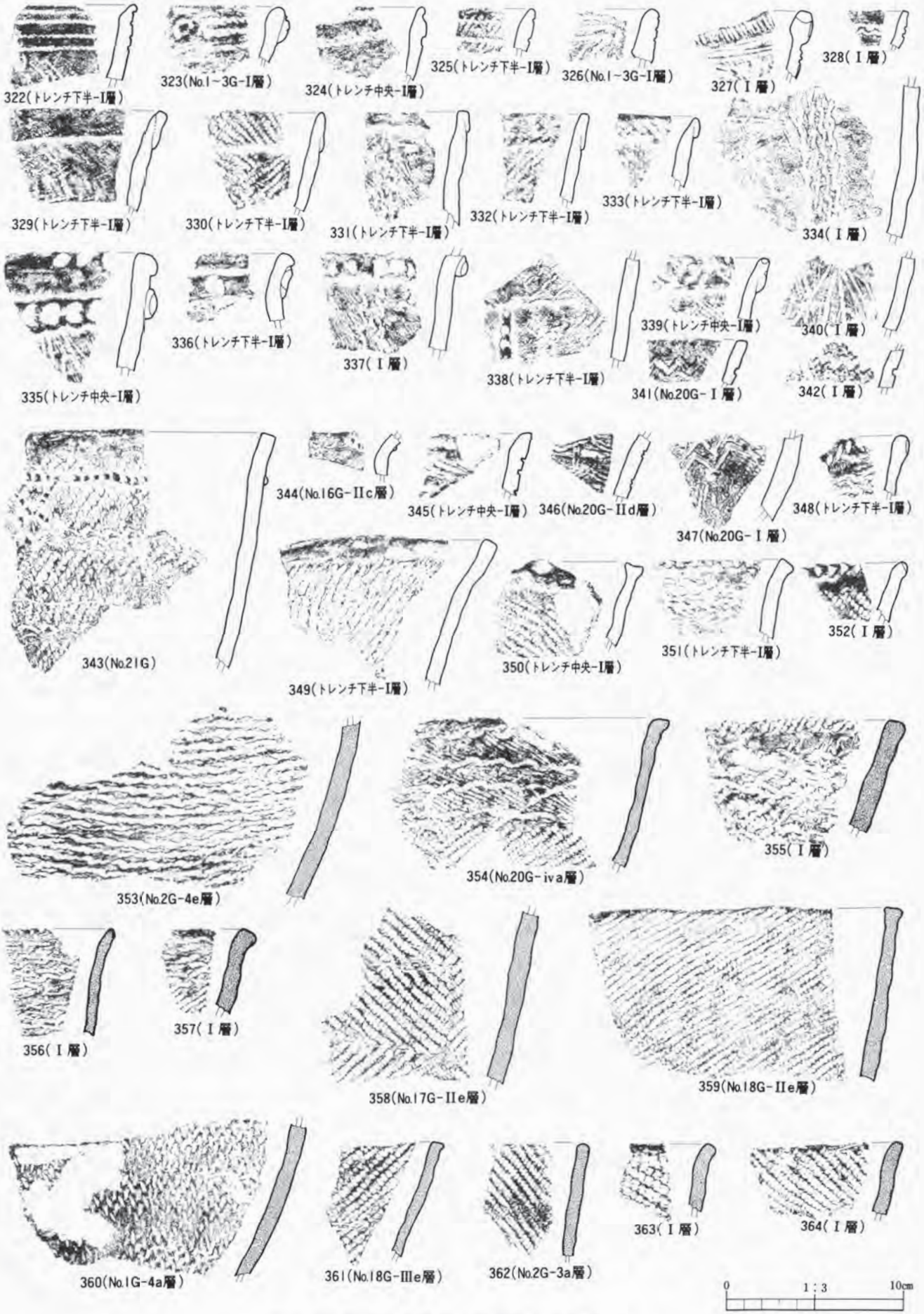
第18図　崎山貝塚第Ⅰ次調査・出土土器(8)



第19図　崎山貝塚第Ⅰ次調査・出土土器(9)



第20図　崎山貝塚第Ⅰ次調査・出土土器(10)



第21図　崎山貝塚第Ⅰ次調査・出土土器(11)

(b)石器（第22図～第28図）

土器の項で記述したとおり、各層ともその層が堆積する以前の遺物が多く含まれており、石器も各層位毎の組み合わせが必ずしも有意ではないので、ここでは剥片石器と礫石器に大別して器種毎に記述する（主体となる時期はおよそ大木１式～大木３式となる）。

剥片石器（１～44）

出土した剥片石器は44点で刺突器、切削器、掻器類、その他の石器などにより構成されるが、定形化した石器のほかに第１次剥離面を大きく残す不定形石器もみられる。なお、着柄剤の付着したものはみられなかった。

刺突器類（１～13）

対象物の第１次獲得手段として用いられた利器で、ここでは石鏃が13点出土している。すべて無茎鏃で、基部形態は平基と凹基の２種がある。抉入率（長さに対する抉入の深さ）は最も大きいもの（５）が12%ほどであり、基部幅は13～18㎜に集中する。側縁形態は基部付近にややや平行な両側縁をもち、ここから直線的に先端部に至るものが多い。

切削器類・掻器類

(1)つまみを有するもの（石匙）（14～23）

形態は、つまみ部の縦軸線に対して直交する刃部をもつもの（14）が１点あり、この他は縦軸線に平行した刃部をもつ。刃部は、角度が大きく剥掻機能を意図したもの（14～16）と、これらより刃部角度が小さく切削機能が主要素となるもの（17～23）の２種がある。剥片の両面から刃部を作り出しているものは少なく、大半は片面加工で裏面に第１次剥離面を大きく残す。

(2) 掻器（30～37）

両面に大きく第１次剥離面を残し、剥離自体のウエーブをそのまま利用して下端部（刃部）に剥掻機能をもたせているものである。形態は不定形なものが多く、30・32・35～37は打面をそのまま残している。35・36は剥掻機能に適した下端部をもつ剥片をそのまま石器として使用しており、刃部には使用によるマイクロフレーキングがみられる。この他のものも剥片に簡単な片面加工を施して、角度の大きな刃部を作り出している。

(3)切削器（24～27・38～44）

切削機能に適した刃部をもつもので、定形化したもの(a)、と第１次剥離面を大きく残し側縁に刃部を作り出したもの(b)およびその他のもの(c)に分けられる。

a（24～26）　いわゆる箆状石器で、いずれも基部欠損品である。

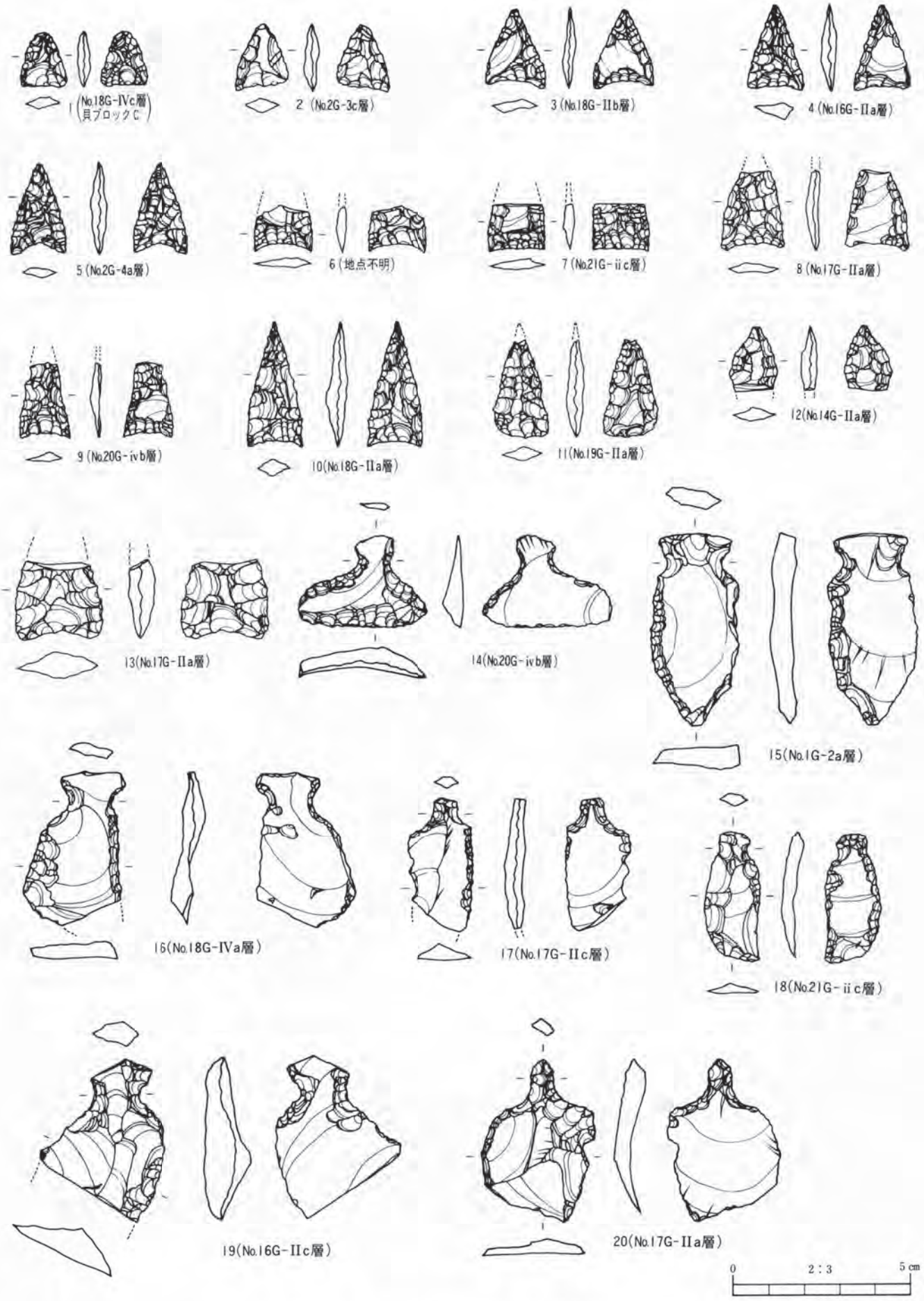
b（38～44）　剥片の側縁に片面加工の刃部をもつもので、39・41・42には打面が残されており、二次加工による剥片形状の変化は小さい。38・41・42は剥片の一部に刃部加工をしており、39・40・43・44は平行する両側縁に加工がみられる。

c（27）　刃部角度が大きく、剥離の新旧が明瞭に判別される。器面が風化後再び２次加工されたものである。

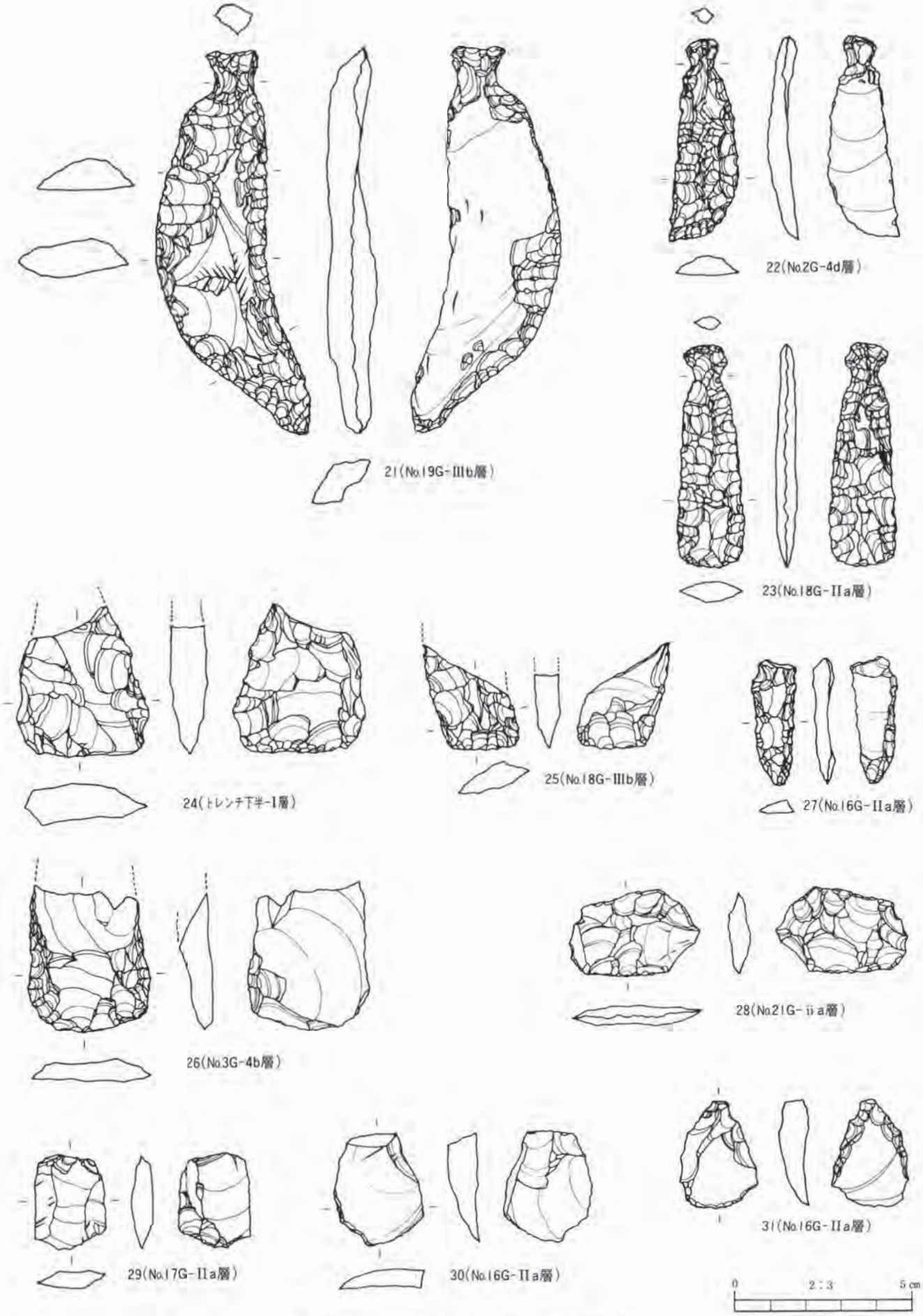
その他の石器

(1)ピエス・エスキーユ（28・29）

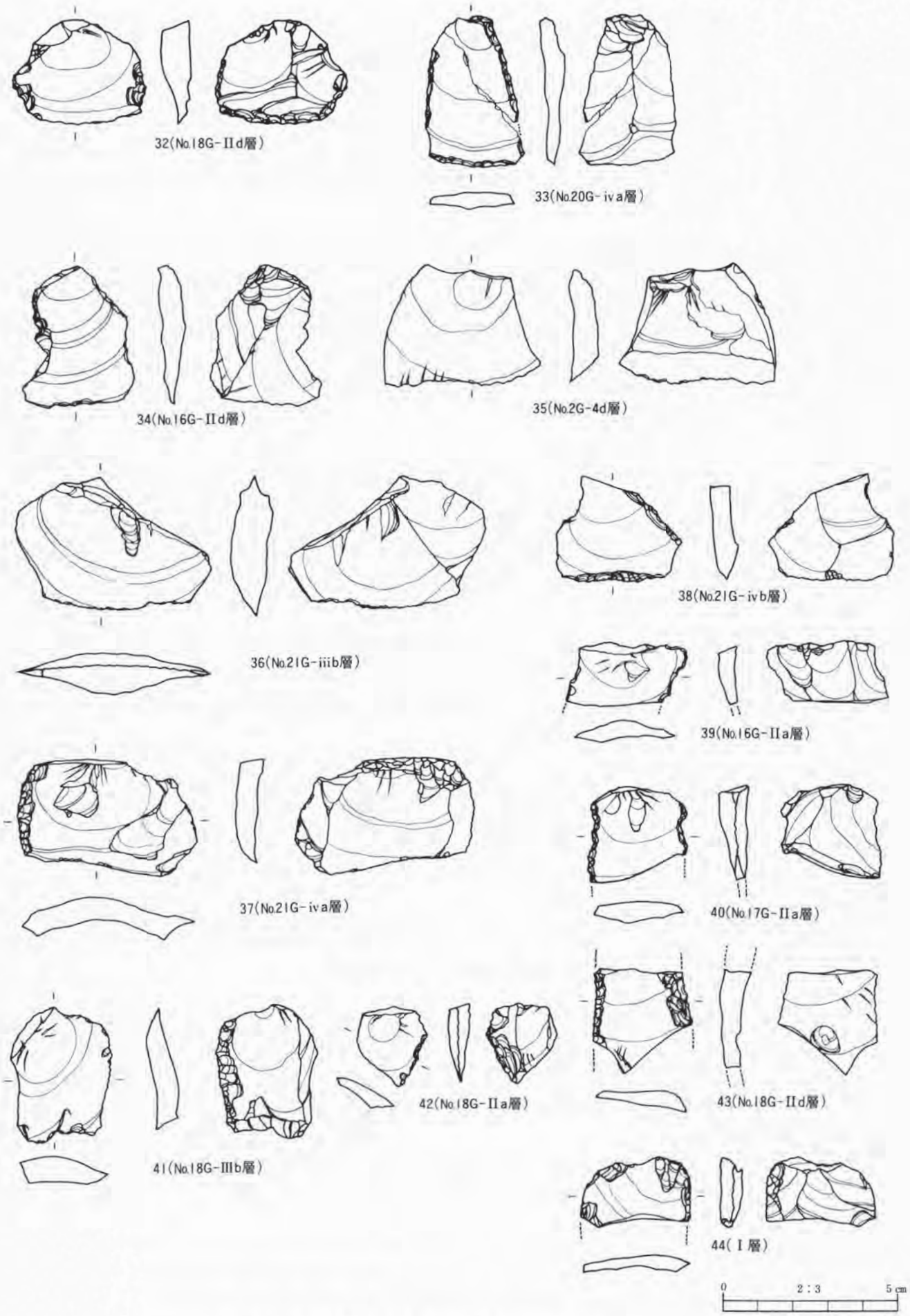
28は上下両側縁に使用による小剥離がみられ、機能刃部は直状で、上縁20㎜、下縁22㎜である。29は下縁が機能部とみられ、刃部は大きく楔として使用された可能性が考えられる。



第22図　崎山貝塚第Ⅰ図調査・出土石器(1)



第23図　崎山貝塚第Ⅰ次調査・出土石器(2)



第24図　崎山貝塚第Ⅰ次調査・出土石器(3)

礫石器（45～83）

図示したものは39点である。今回の調査では礫器、特殊磨石、石皿、砥石の出土が特徴的であるが、これとは対象的に石錘類は全く欠落している。

石斧（45～51）

いずれも欠損品である。刃部には両刃のもの（48）と片刃のもの（50）の２種がある。49は敲打成形時のものである。48は調整が粗雑であり成形時の敲打痕がみられ、刃部も鈍い。

礫器（52～57）

およそだ円形に近い自然礫を打ち欠いて片刃の刃部を作り出している。54～56のように比較的鋭い刃部をもつものは少なく、53・57のように鈍いものや52のように刃部の不鮮明なものの方が多い。後二者については製作途中の未製品である可能性も考えられる。54・56の刃部には使用による敲打痕がみられるが、55については刃部以外のところに敲打痕がみられる。刃部の形態や使用痕よりチョッパー的な機能が想定される。図示した以外に約40点の出土がある。

敲打磨石類（58～68）（註１）

(1)特殊磨石（58～67）

断面三角形の自然礫の側縁部を使用する石器である。機能磨面自体は、後述する敲打磨石と同様であるが、素材の選択や機能磨面の作り出し方に差異があり区別される。今回出土したものはすべて１側縁を機能磨面（Ａ面）とし、これに隣接する面を磨き、調整磨面（Ｂ面）としている。機能磨面は60のように幅の狭いもの（10㎜）から58のように広いもの（25㎜）とややばらつきがあるが、20㎜くらいに集中する。機能磨面はざらざらしており、磨り潰しなどの機能が考えられる。調整磨面は滑らかであるが、使用によるものではなく、機能磨面の幅を一定に保つ調整が行われたものと考えられる。58・60は礫器的刃部をもち、欠損後に再利用されたもの。64は先端部に敲打痕を有するもの。66は調整磨面の端部に敲打痕を有するもの。65は使用時の剥離痕が伴うものである。

(2)敲打磨石（68）

１点のみである。扁平のだ円礫を使用し、上下両側縁を機能磨面としている。実測図下端の機能磨面には調整剥離がみられるが、上端にはない。半欠した後に再利用され、割れ口にも磨面（調整磨面？）がみられる。両側面にある大きな剥離は欠損後のものである。

敲石（69・70・72・73）

自然礫をそのまま利用する。69・73は長軸方向の両端部を中心に使用する。70は両側縁を使用するもの、72は円形礫の側縁を使用するものである。

凹石（71・74～78）

素材の選択には一貫性がみられないが、いずれもよく使い込まれた凹部が数ケ所みられる。

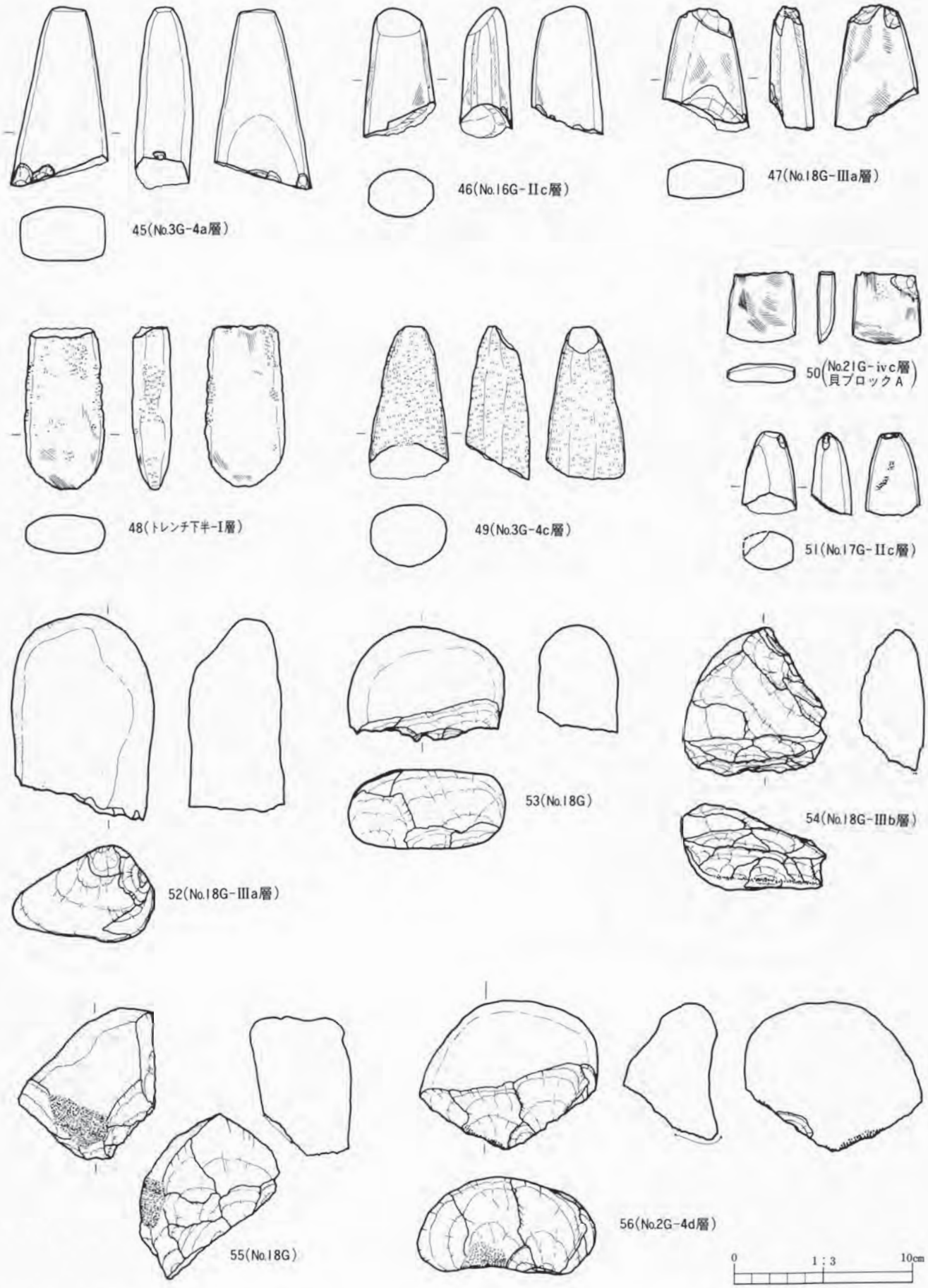
石皿（79・80）

比較的ち密な砂岩質の素材を用いる。敲打により整形するが、使用面は平滑である。

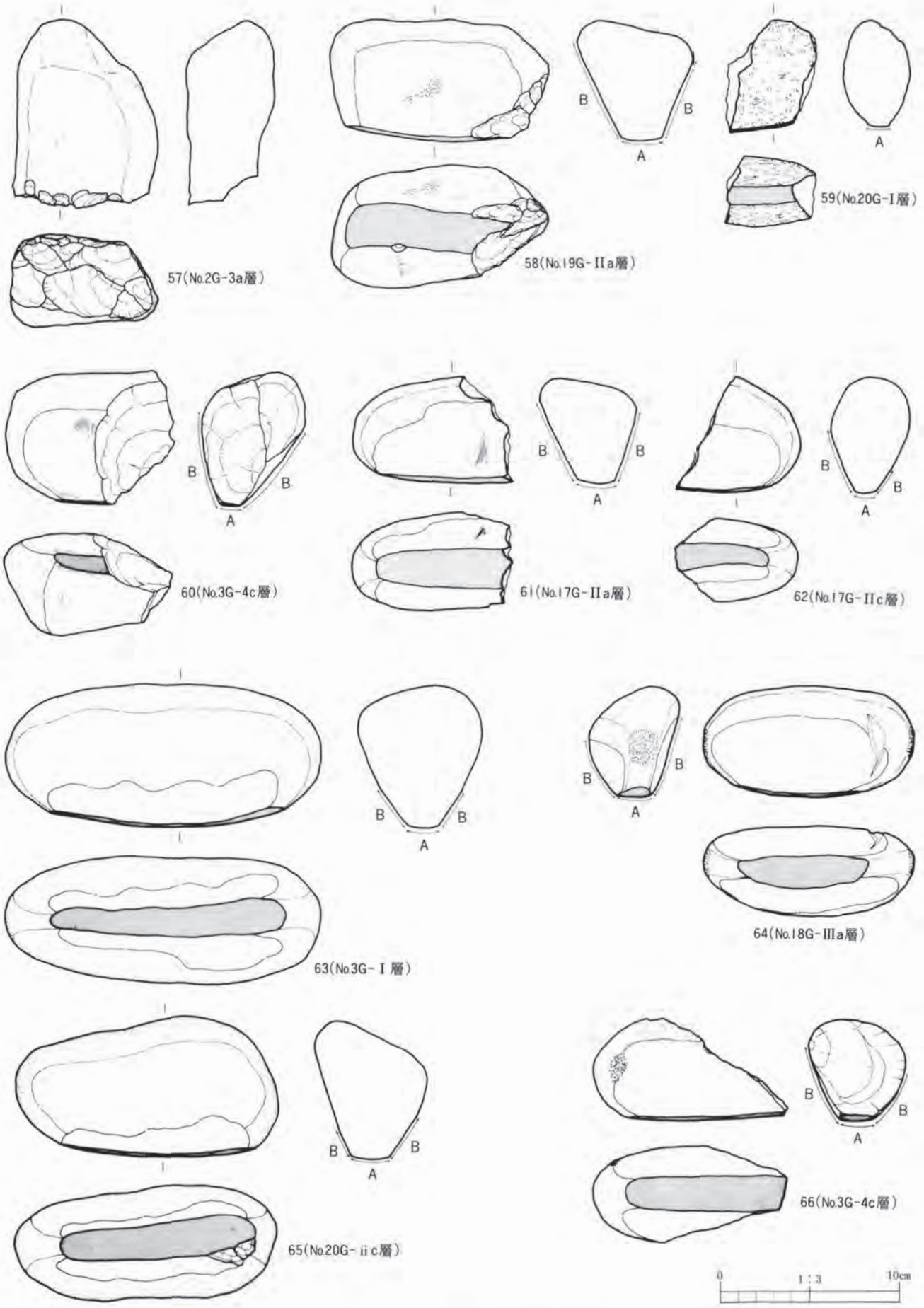
砥石（81～83）

石皿と同様な素材を用いるため判別しにくいものもある。使用面は平滑であるが、83は溝状の磨面を有する。石皿・砥石とも図示した以外に小片が多数出土している。

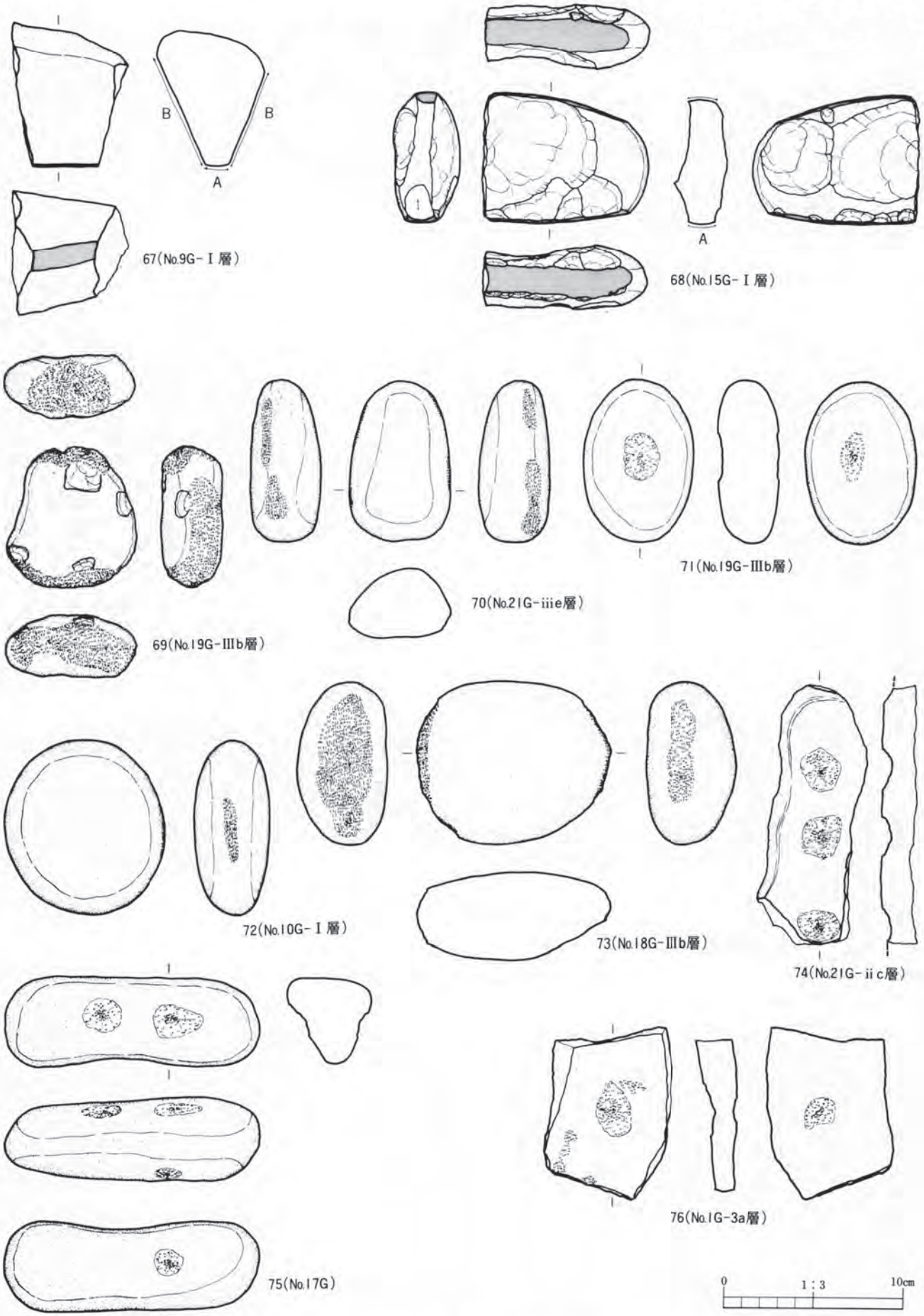
註１（参考文献）　八木　光則　「いわゆる『特殊磨石』について―中部地方における縄文早期の石器研究への問題提起―」『信濃』28－4　1976
武田　将男ほか『大館町遺跡―縄文中期集落址1976年度調査報告―』岩手大学考古学研究会編　1978



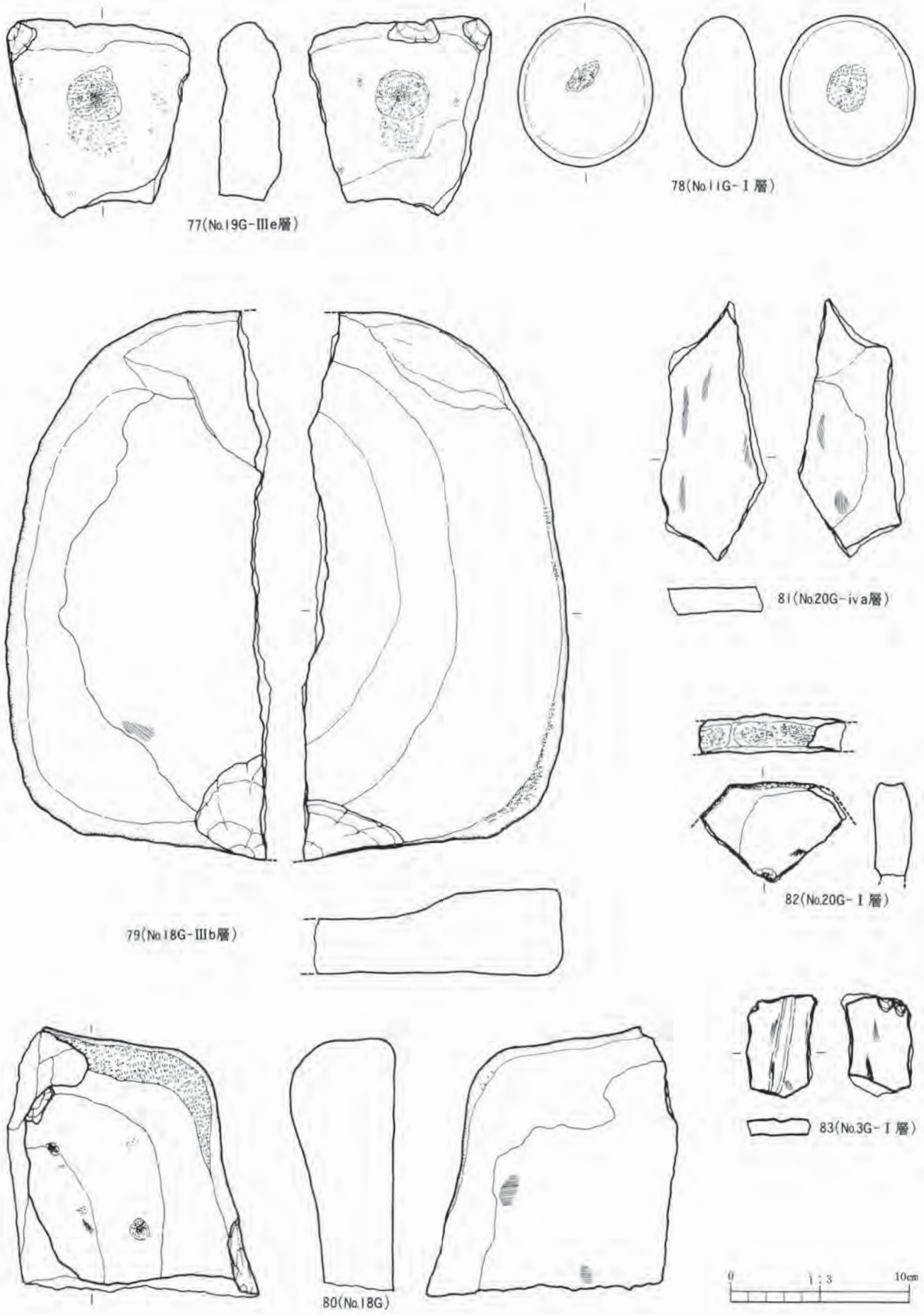
第25図　崎山貝塚第Ⅰ次調査・出土石器(4)



第26図　崎山貝塚第Ⅰ次調査・出土石器(5)



第27図　崎山貝塚第Ⅰ次調査・出土石器(6)



第28図　崎山貝塚第Ⅰ次調査・出土石器(7)

(c)土製品・石製品（第29図）

今回の調査では出土量が少なく、図示したものがすべてである。

1は岩偶で、白色の鉱物を用い打製（押圧剝離）により製作している。人あるいは他の動物を模したものと思われる。

2は磨製石斧のミニチュアで、器面は整形時に小さく面取りされ、これに伴う擦痕が観察される。基部には使用時のものと思われる剝離が伴う。

3は焼成された粘土塊。4は滑石製の玦状耳飾。5は有孔礫である。穿孔は自然であるが、後面には沈線、擦痕が伴う。

(d)骨角器（第29・30図）

ここでは動物の骨、角、歯、牙などを用いて製作した利器、工具、装飾品などの製品と加工痕を有する素材を一括して記述する。

今回の調査で出土したものはすべて斜面上端のNo.20～21グリッドから出土したものである。層位は、貝ブロックやⅲc層、ⅲb層、ⅱc層などの自然遺物包含層から他の自然遺物と共に出土したもので、特徴的な出土状況を示すものではない。

骨角器（製品）

6は棒状の刺突具（骨針など）の一部である。器面は磨製により面取りされている。焼成を受けている。

7はイノシシ（オス）の左下顎犬歯製の刺突具である。舌側のエナメル質を用いるが、基部と先端部を欠く。後面には製作時の擦痕が見られる。

加工痕を有する素材

8はイノシシの右距骨であるが、側面に3面の磨面が認められる。9はシカの鹿で左角座付近（第1角叉）である。角座、第1枝基部、角幹の三方を打ち折る。切断面には、緻密質部を石器により打ち削り（chop）溝状にして海綿質部で折られている。

10はシカの右中手骨近位部（奇形骨）である。側面に楔状の石器（おそらくはピエス・エスキーユ）を髄孔に達するまで打ち込み、縦に半裁している。後面にはこの打込みに伴う剝離痕が観察される。

11はヒトの左上腕骨遠位端であるが、人為的に打ち割られたものか自然なのか不明である。

12はヒトの右尺骨である。遠位端を欠く。近位部の粗面には石器によると思われる切り傷が認められる。

(e)自然遺物

自然遺物は動物遺存体の他に炭化物があるが、炭化物は細片が多く同定不可能であるために動物遺存体を中心に述べる。動物遺存体は哺乳類や魚類などの骨、貝殻、棘皮動物などからなるが全体に保存状態があまり良くない。No.20～21グリッドに集中する自然遺物包含層から出土したものと貝ブロックから出土したものが主体を占めるが、前者の量が多い。なお、自然遺物包含層は間層をはさみながら下層からⅳa層、ⅲb層、ⅱc層と続くが、ⅱb・a層にもわずかに自然遺物が含まれる。なお、得られた資料は発掘中に現場で取り上げたものと、調査中に採取したサンプルを1.5㎜メッシュのふるいで選別したものの両者がある。 以下同定できたものの種名を記すが、前述したものも再掲している。

〈崎山貝塚第１次調査出土動物遺存体種名一覧〉

I　軟体動物　MOLLUSCA

i）二枚貝綱　BIVALVIA

1　イガイ　Mytilus coruscus Goulp

II　節足動物　ARTHROPODA

i）蔓脚亜綱　CIRRIPEDIA

1　フジツボ科の一種　Balanidae gen. et sp. indet.

III　棘皮動物　ECHINOERMATA

i）海胆綱　ECHINOIDEA

1　ムラサキウニ　Anthocidaris crassispinaa (A. Agassig)

IV　脊椎動物

i）硬骨魚綱　OSTEICHTHYES

1　マグロ　Thunnus thynnus (LINNÉ)

2　カツオ　Katuwonus pelamis (LINNÉ)

3　ブリ　Seriola quingueradiafa TEMMINCK et SCHLEGEL

4　マダイ　Pagrus major (TEMMINCK et SCHLEGEL)

5　カサゴ類　Scorpaenidae sp. indet.

6　アイナメ　Hexagrammos otakii (JORDAN et SCHLEGEL)

ii）哺乳綱　MAMMALIA

1　ヒト　Hommo sapiens

2　タヌキ　Nyctereutes procyonoides GRAY

3　イヌ　Canis familiaris (LINNÉ)

4　イノシシ　Sus scrofa LINNÉ

5　シカ　Cervus nippon TEMMINICK

6　鰭脚類の一種（アサラシ科　PHOCIDAE か？）

これらのうち、イガイは貝ブロックＡ～Ｃで破砕あるいは粉砕された状態で多く検出された。また、No.20～21グリッドのⅱ層中にもわずかに粉砕された貝殻が含まれていた。なお、貝ブロックからは魚骨（棘）が多く出土しているが種の同定はできていない。フジツボ科の一種とムラサキウニ（殻・棘）は貝ブロックＡからのみ出土している。

第13図版

マグロは棘（２点）が貝ブロックＡから出土している。カツオは貝ブロックＣから右主上顎骨が、No.21グリッドーⅲｂ層から腹椎１点が、同－ⅱｃ層から腹椎３点が、同－ⅱｂ層から腹椎１点が出土している。また、同－層位不明の環椎が１点出土している。ブリはNo.21グリッドーⅱｃ層から腹椎１点が出土している。マダイは貝ブロックＣから歯１点が、No.21グリッドーⅱｃ層から尾椎１点が出土している。カサゴ類は貝ブロックＣから尾椎１点が出土している。アイナメは貝ブロックＡから尾椎１点が出土している。

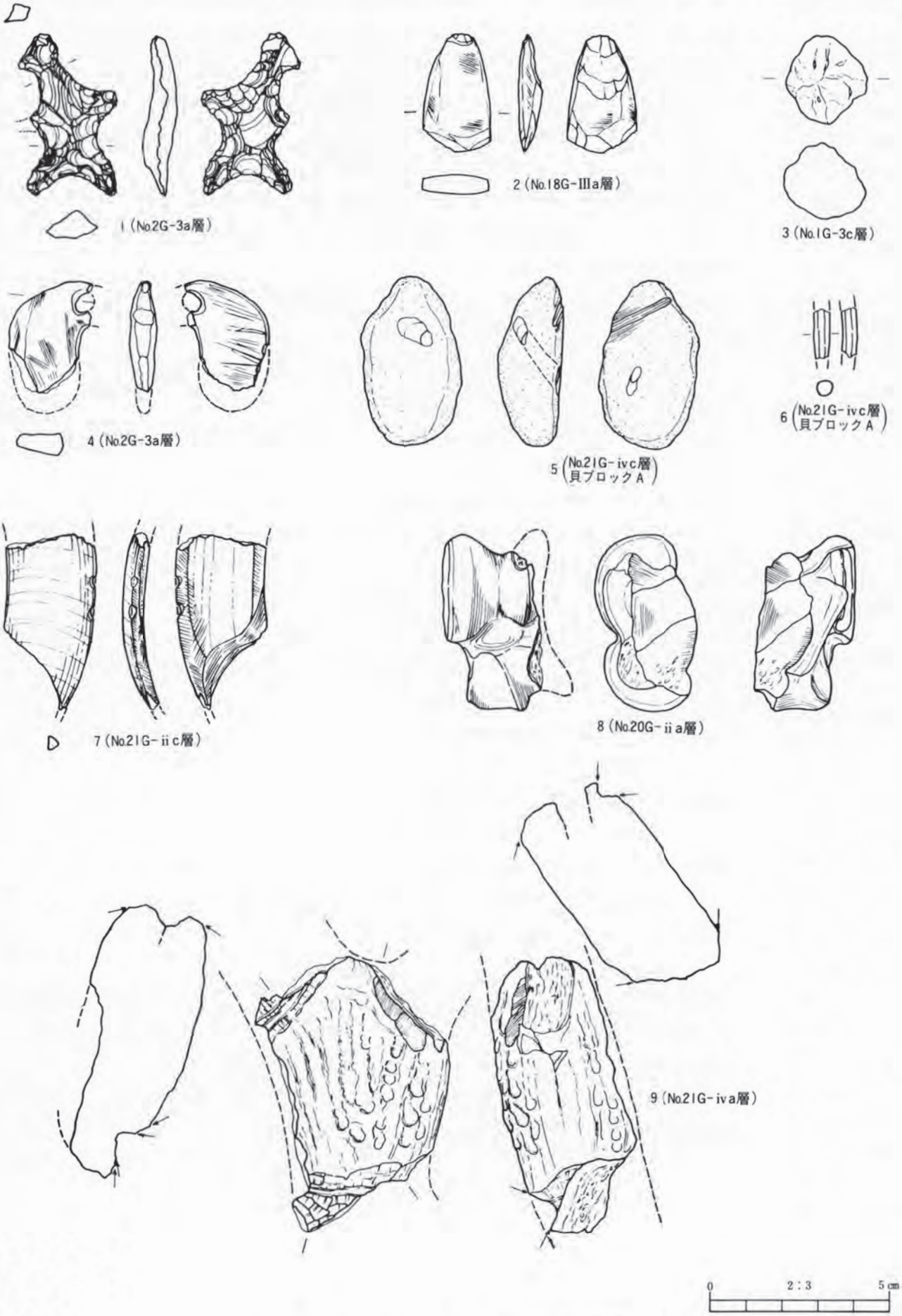
第13図版

第30図

ヒトはNo.21グリッドーⅲｂ層から左上腕骨遠位端と右尺骨（遠位端を欠く）が出土している。

第11図版上段

タヌキはNo.21グリッドーⅲｂ層から左上顎骨が出土している。イヌはNo.21グリッドーⅲｂ層から右上顎第１大臼歯が出土している。



第29図　崎山貝塚第1次調査・出土土製品、石製品
骨角器、自然遺物

第11図版下段　イノシシはNo.21グリッドーⅱｃ層から左肩甲骨１点と腰椎骨１点およびオスの左下顎犬歯１点が、同ーⅱｂ層から左第１指骨（基節骨）１点が、No.20グリッドーⅱａ層から右距骨１点が、No.21グリッド（層位不明）から右踵骨が出土している。

第12図版　シカは最も出土点数が多く、貝ブロックＡから右第３指骨（末節骨）１点が、No.21グリッドⅳａ層から、右脛骨遠位端１点、右距骨１点、左鹿角（角座付近）１点、鹿角片１点、歯数点が出土している。同ーⅲｂ層からは左肩甲骨１点、歯数点が出土している。同ーⅱｃ層からは右中手骨近位部（奇形骨）１点、右肩甲骨１点、脛椎骨（Ｃ－６）１点、歯数点が出土している。No.20グリッドーⅱａ層から右第２指骨（中節骨）１点、No.21グリッドーⅱａ層から右上腕骨遠位端１点が出土している。

第11図版上段　鰭脚類の一種はNo.21グリッドーⅱｃ層から右大腿骨１点が出土しているが、アザラシ科の一種かと思われる。

この他、四肢骨や助骨を中心とした骨片が多数出土しており、大半がシカやイノシシなどの大型獣のものと思われるが同定はできなかった。

以上のように種の同定のできたものを層位毎の組み合わせとして整理してみると以下のようになる。（No.20～21グリッド主体）

〈No.21グリッド－貝ブロックＡ（大木１式以前）〉

イガイ・フジツボ科の一種・ムラサキウニ・マグロ・アイナメ・シカ・未同定の魚骨（棘）多

〈No.21グリッド－貝ブロックＢ（大木１式以前）〉

イガイ・未同定の魚骨（棘）多

〈No.18グリッド－貝ブロックＣ（大木１式以前）〉

イガイ・カツオ・マダイ・カサゴ類

〈No.21グリッドーⅳａ層（大木２式期）〉

シカ

〈No.21グリッドーⅲｂ層（大木３式期）〉

カツオ・ヒト・タヌキ・イヌ・シカ

〈No.21グリッドーⅱｃ層（大木３式期）〉

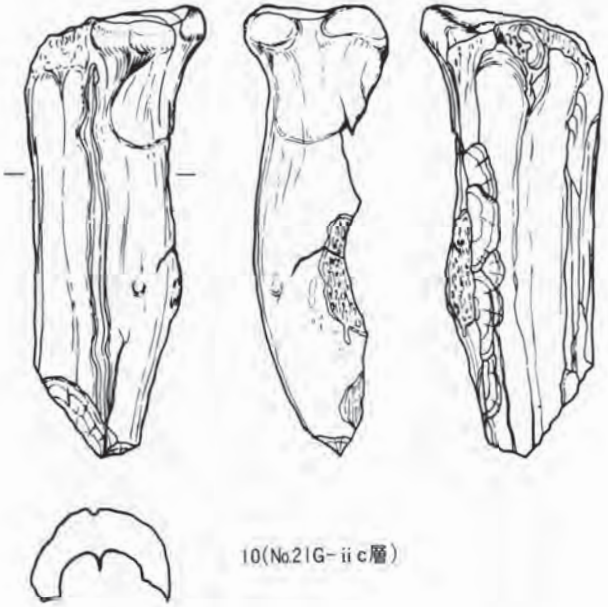
カツオ・ブリ・マダイ・イノシシ・シカ・鰭脚類の一種

〈No.21グリッドーⅱａ・ｂ層（大木３式期）〉

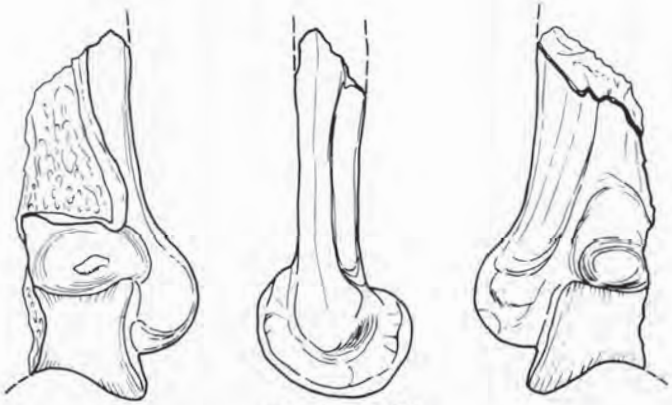
カツオ・イノシシ・シカ

各層を通して最も目につくのがシカ・イノシシであるが、カツオの出土も比較的安定している。貝ブロックを構成しているイガイ（おそらくはムラサキインコなども含んでいるであろう）は地点や層位を変えて貝層や貝ブロックを形成している可能性がある。

これらの他にNo.３グリッド－４ａ層からも骨片を得ているので、No.20～21グリッド付近（斜面上端部）以外にも自然遺物包含層が存在するものと思われる。



10(No.21G-ⅱc層)



11(No.21G-ⅲe層)

12(No.21G-ⅲe層)

0　1:3　10cm

第30図　崎山貝塚第Ⅰ次調査・出土自然遺物

Ⅳ　調査のまとめ

白石遺跡第１次調査

今回の調査では、ピット群と遺物包含層を検出したが、ピット群の時期を決定する資料は得られなかった。ピット群の性格も不明であるが、昭和60年度に実施した隣接地での調査でもフラスコピットなどを検出しており、調査区周辺にも広範囲に遺構が存在するものと思われる。

調査区付近は白石遺跡の北東端部として理解してきたが、前述したように地形的には白石遺跡と大付遺跡は連続した段丘面上に立地しており、今後の調査によりこれらの範囲と内容をより明確にしていく必要がある。

崎山貝塚第１次調査

本年度の調査は、貝塚南斜面における貝層や自然遺物包含層のあり方を探ることを目的とし、トレンチによる発掘調査とした。地山面まで掘り下げた面積はわずかであるが、極めて多くの遺物を検出した。

遺物包含層は、大木１式以前（おそらくは大木１式前半期～直前型式期）に堆積が始まり、ほぼ大木３～４式期まで連続して堆積している。特に№20～21グリッドでは、ⅳａ層（大木２式期の自然遺物包含層）が堆積した後に、ⅲｃ層～ⅱａ層の大木３式期の遺物包含層などが堆積している。この中で、自然遺物包含層は、ⅲｃ層やⅱａ層などの間層をまじえながら断続的に堆積している。１つの層がどのくらいの廃棄ブロックに細分できるのかは調査中に確認できなかったが、自然遺物が廃棄される層とそうではない層があること自体が季節性などに関係している可能性があるので今後の調査で解明していく必要がある。

崎山貝塚の自然遺物包含層は、シカ・イノシシを中心とした多くの獣骨とカツオなどの魚骨および微量の粉砕された貝殻から構成される。これは他の貝塚での混貝土層や混土貝層に相当するものであるが、このような質的な違いは遺跡の立地する環境だけでは説明しにくい面もある。崎山周辺の海岸線は前述したように急崖をなし、岩礁地帯が続いている。ここにはムラサキインコガイ・イガイ・エゾアワビ・タマキビ・レイシなどの貝類が棲息しているが、大木２～３式期においては重要な食糧資源とはなっていないようである。これに対して、最下層にはイガイを主体とした貝ブロックが存在しており、この違いがどのような理由によるものなのか、今後の研究課題とする。

また、遺物包含層は水田面下にもぐり込んでおり、常時冠水しているこの地区に低湿地性の特殊な遺物包含層の検出される可能性が指摘できる。

遺物については、新旧のものが混在しており、特に土器は出土量の割には完形品がなく、すべて破片のみであった。共伴関係など十分に吟味できなかったが、今後資料の蓄積を得ち、また、他遺跡出土の資料とも比較を行い検討して行くこととする。石器やその他の遺物についてもその層位以前の遺物が混在しているものと思われ、これの抽出が今後の課題となる。

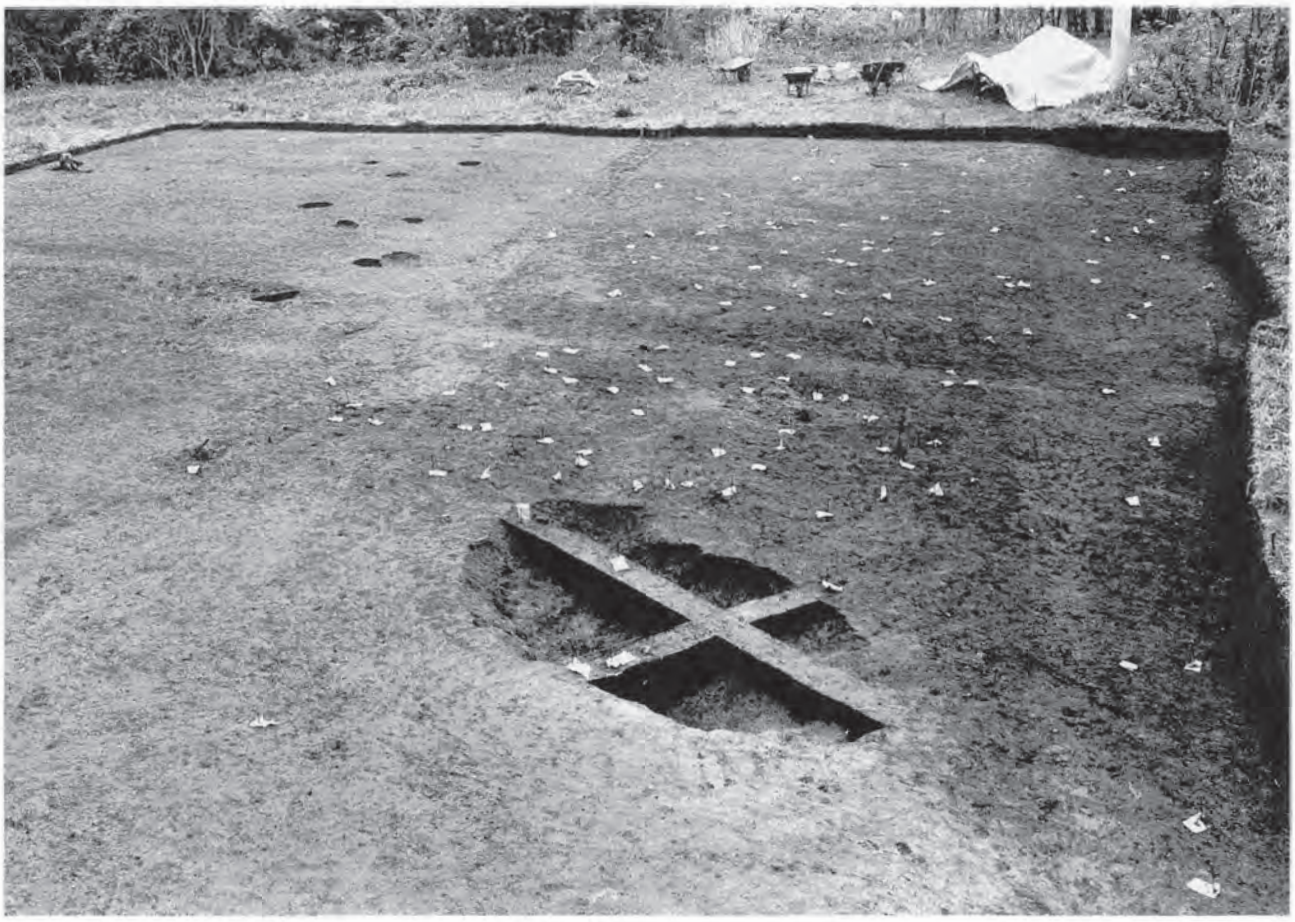
最後に、自然遺物については特に人骨が注目される。尺骨の近位端には明らかに人為的と思われる擦痕がみられ、どのような理由でつけられたものか解明して行く必要がある。

第１図版

白石遺跡第１次調査区航空写真　（南東から）

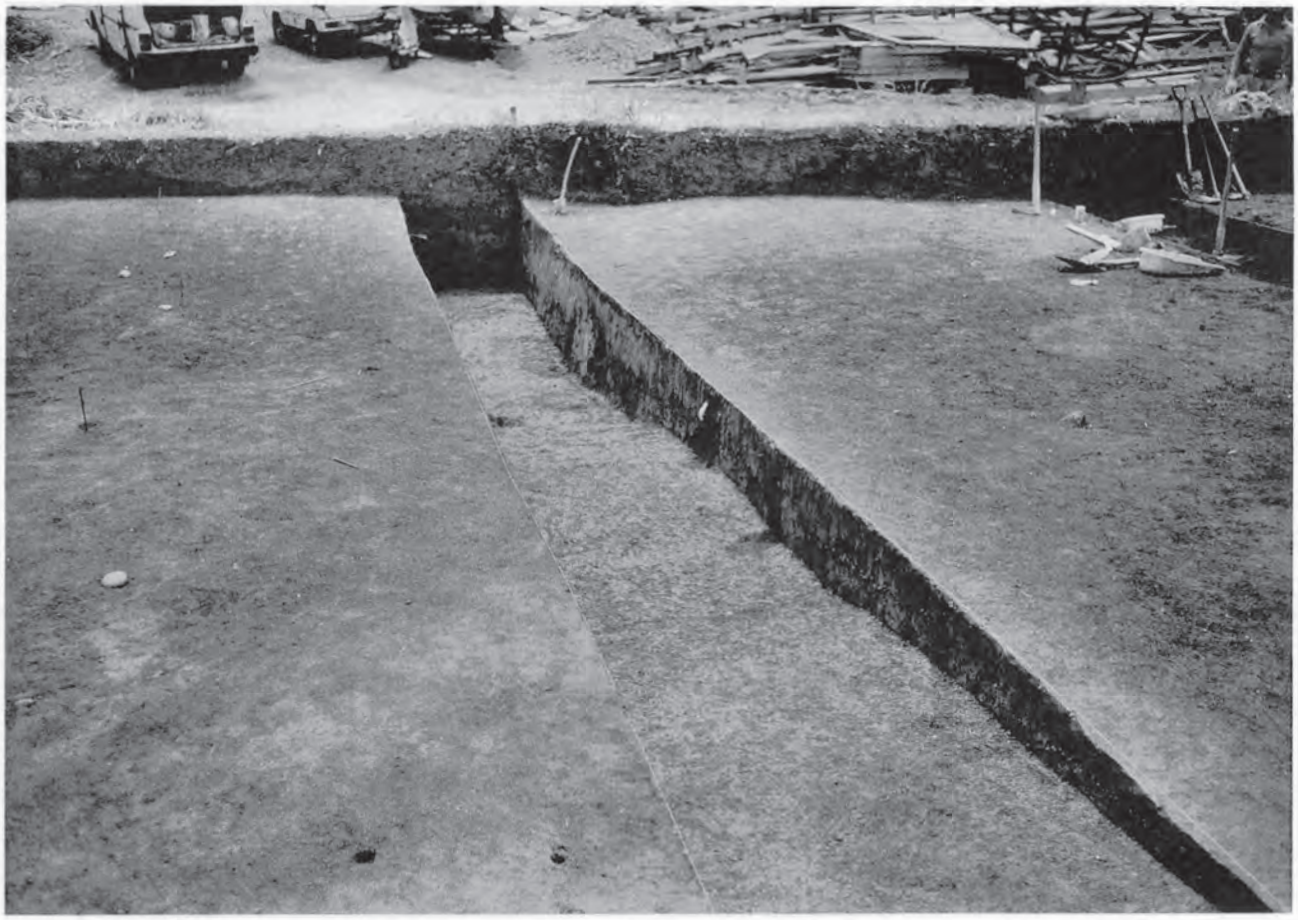
調査区全景　（東から）

第２図版

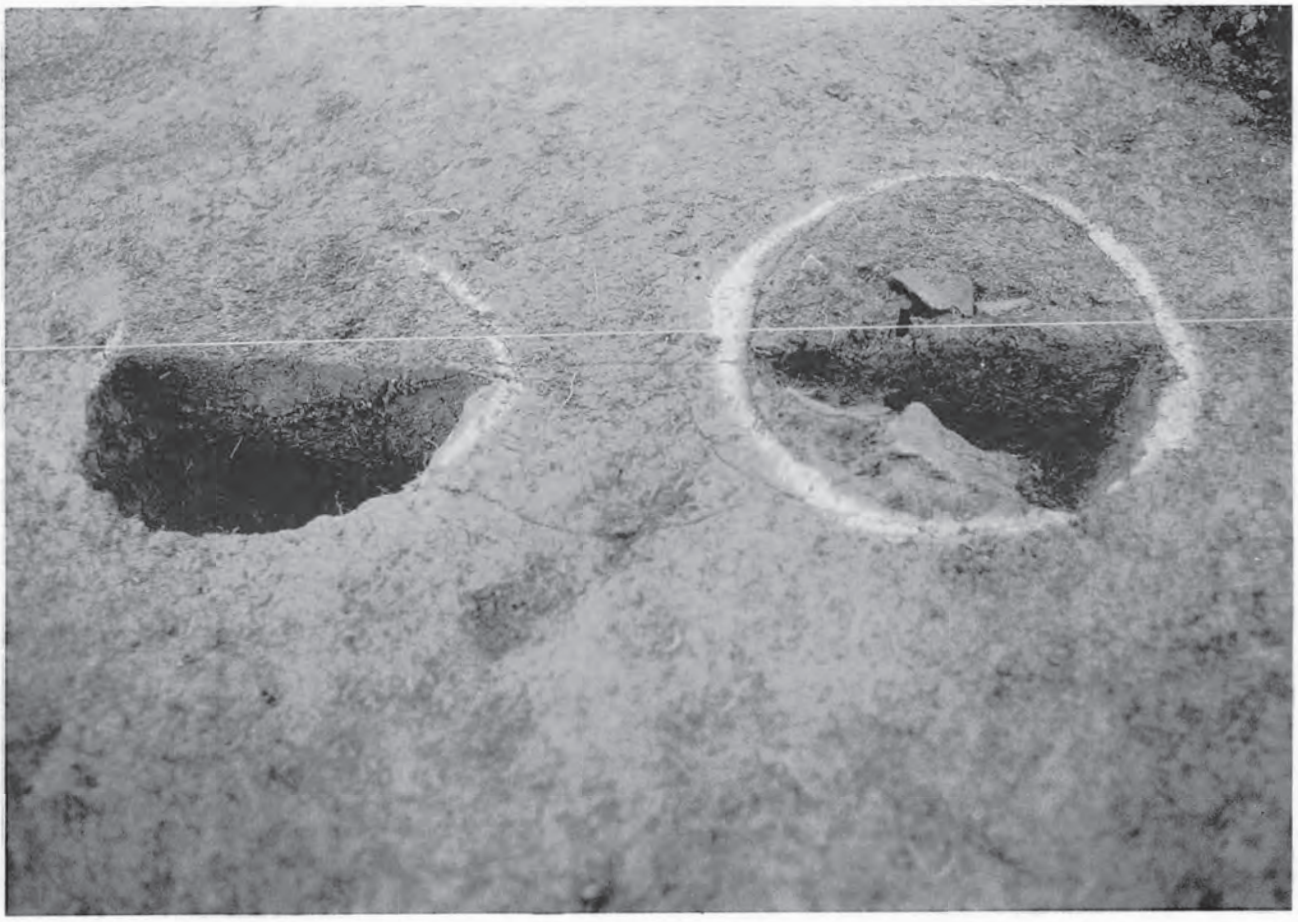


調査区全景　（西から）

遺構検出状況　（東から）



遺物包含層堆積状況



検出遺構　（Ｐ３、Ｐ２）

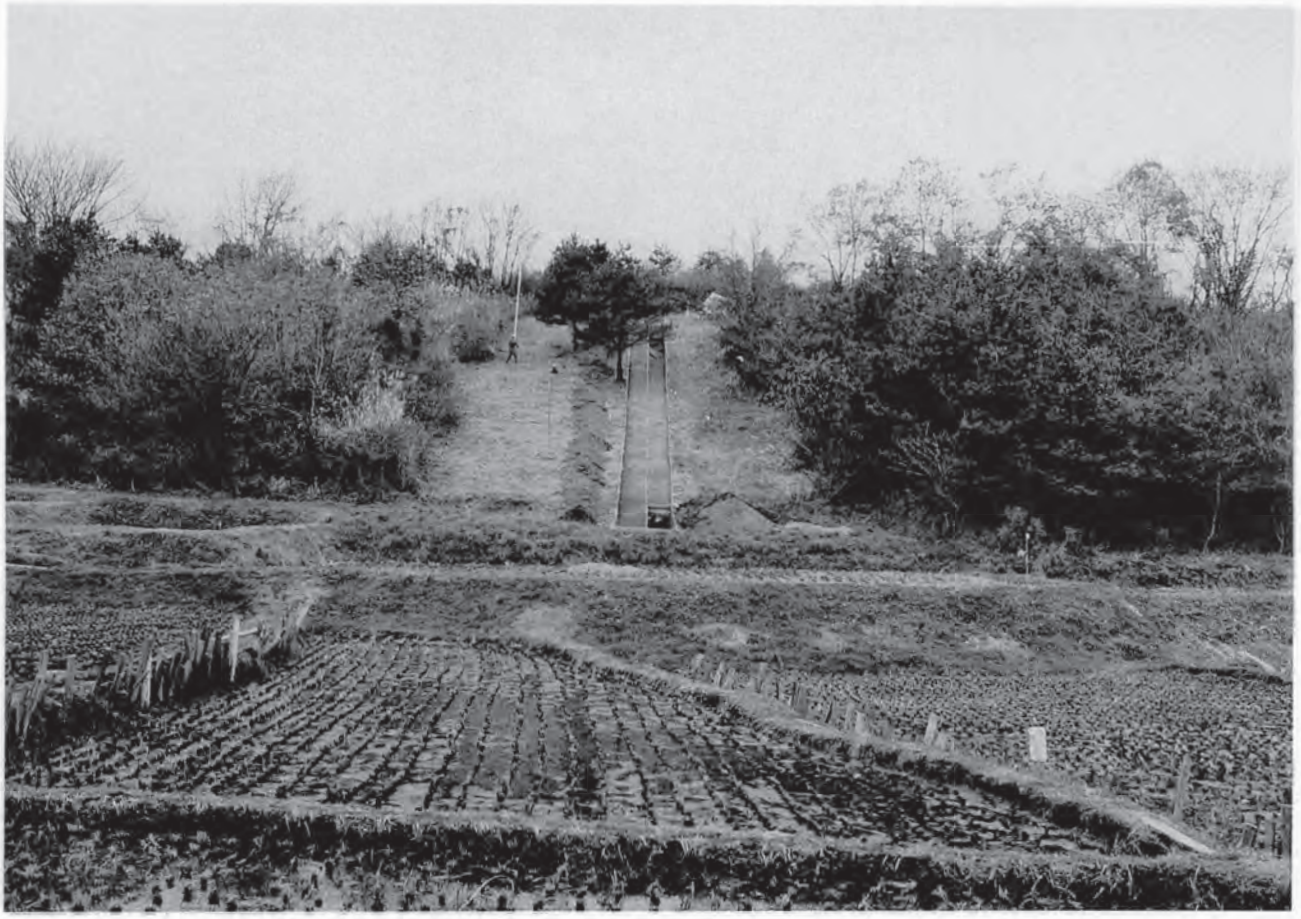
第４図版

崎山貝塚全景　（南から）

崎山貝塚全景　（北東から）

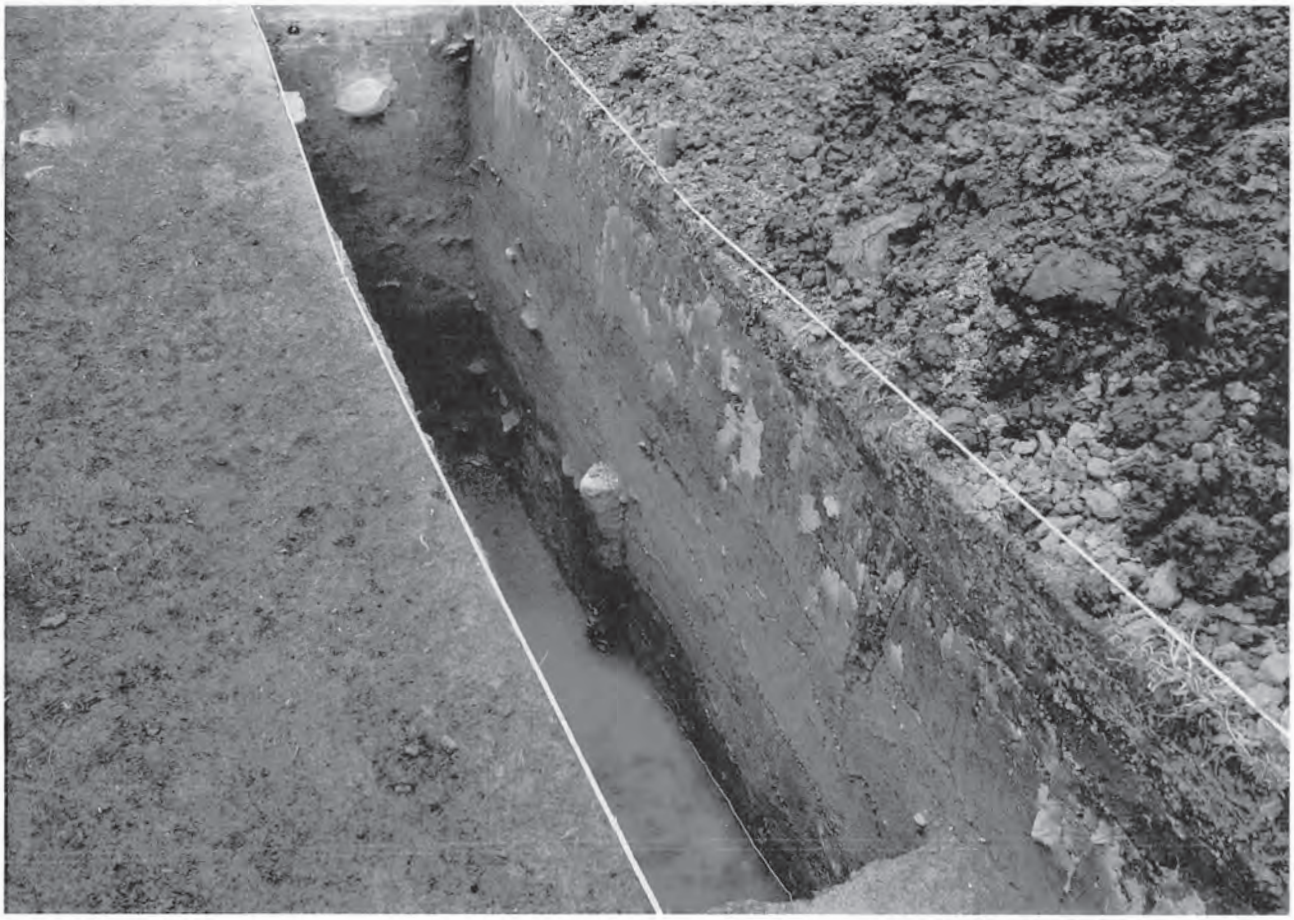
第５図版

崎山貝塚全景　（東南東から）



崎山貝塚第１次調査区全景　（南東から）

第６図版

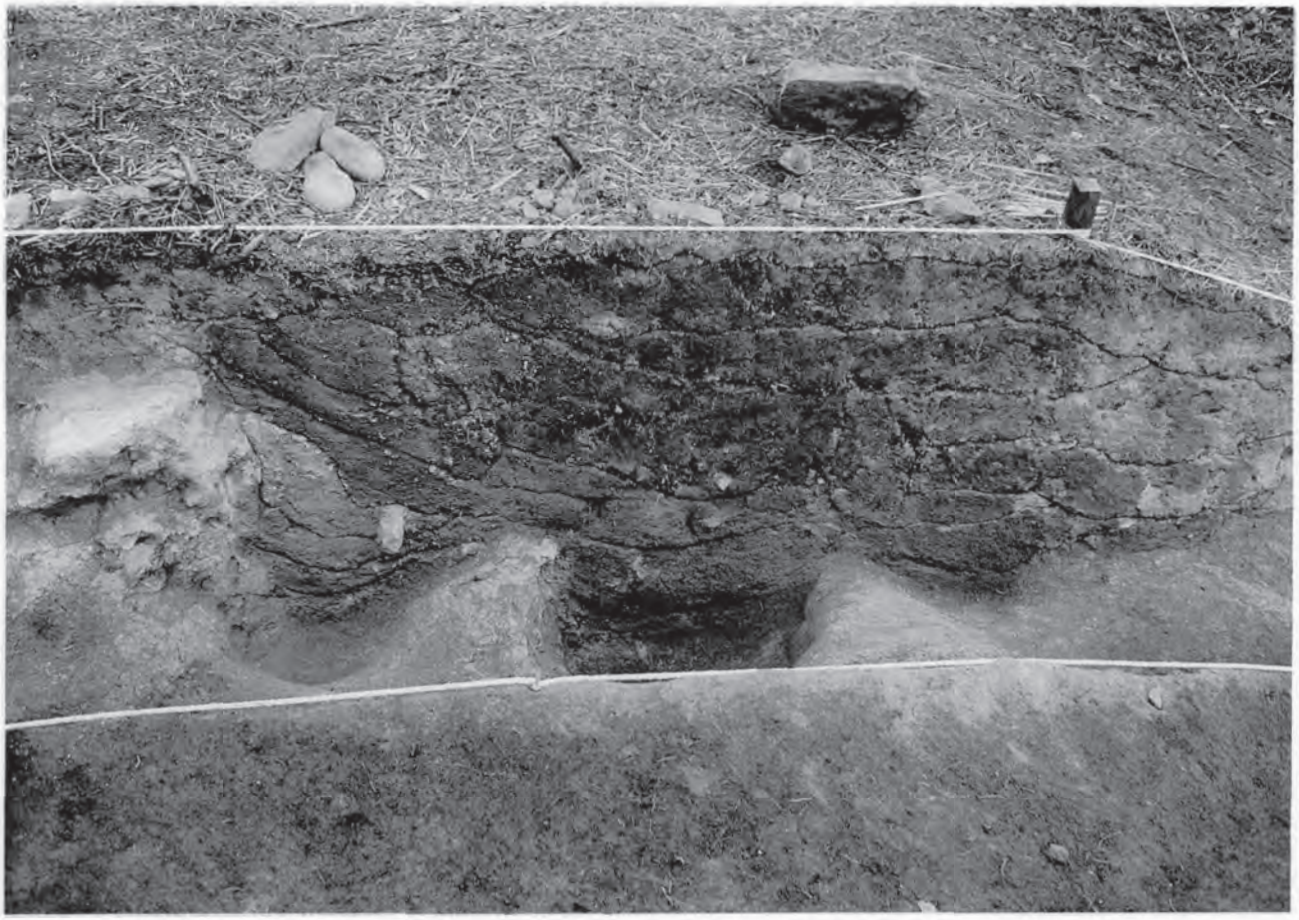


遺物包層堆積状況（No.２，３グリッド）

遺物包含層およびＰ－１堆積状況（No.１，２グリッド）

第７図版

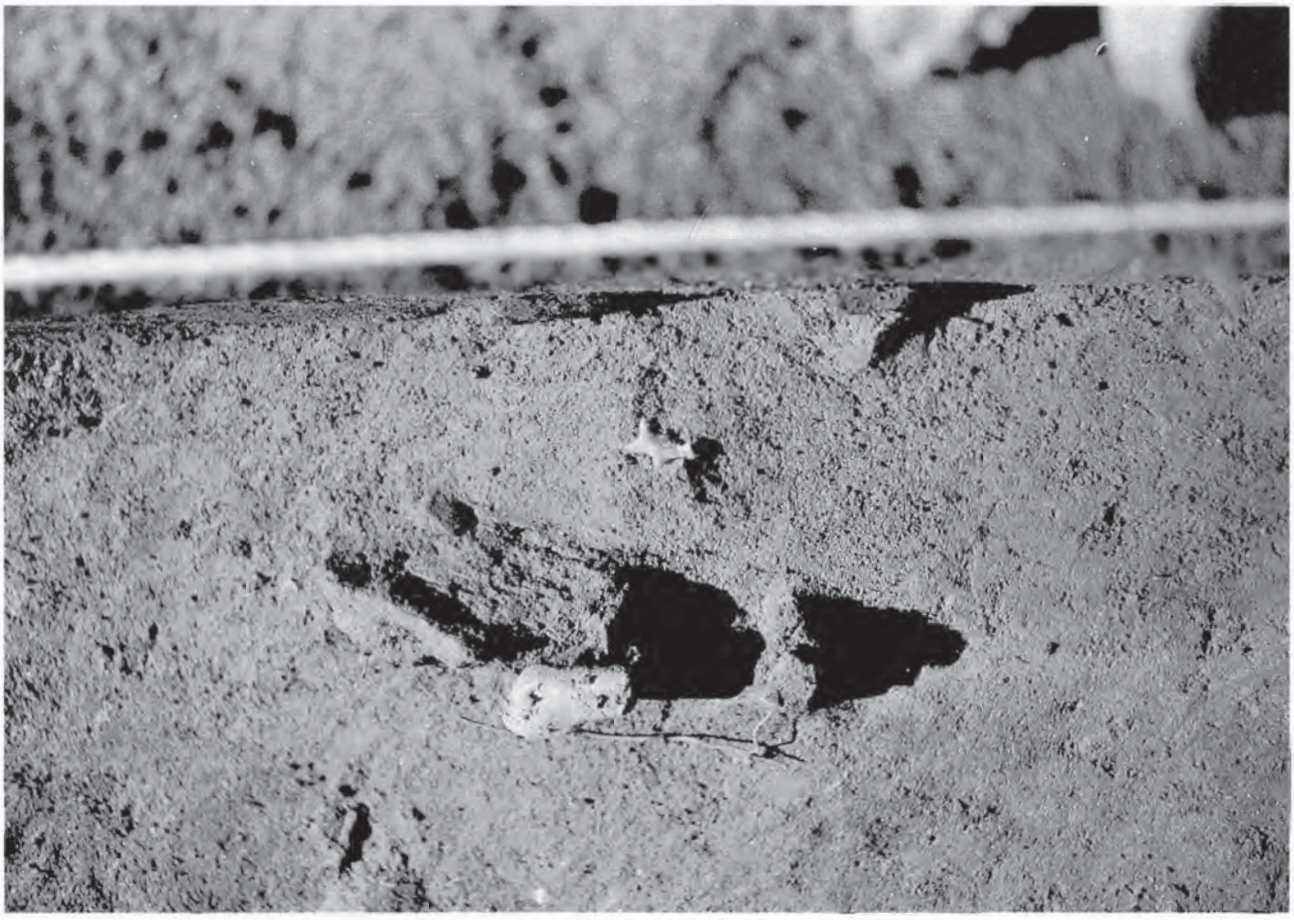
遺物包含層堆積状況（No.16～19グリッド）



自然遺物包含層堆積状況（No.20,21グリッド）

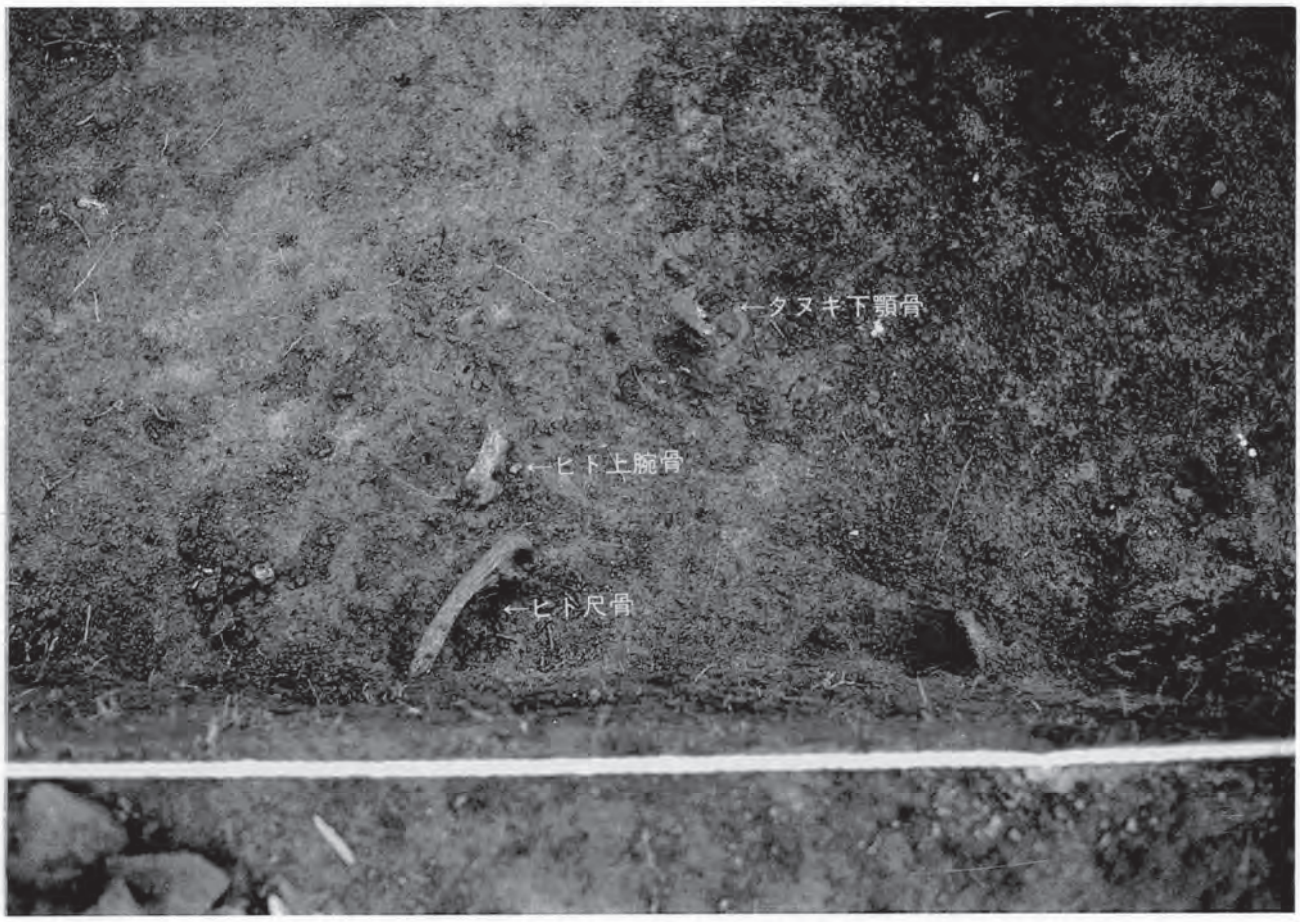
第８図版

遺物出土状況　（No. 2 グリッド）



遺物出土状況　（No. 2 グリッド）

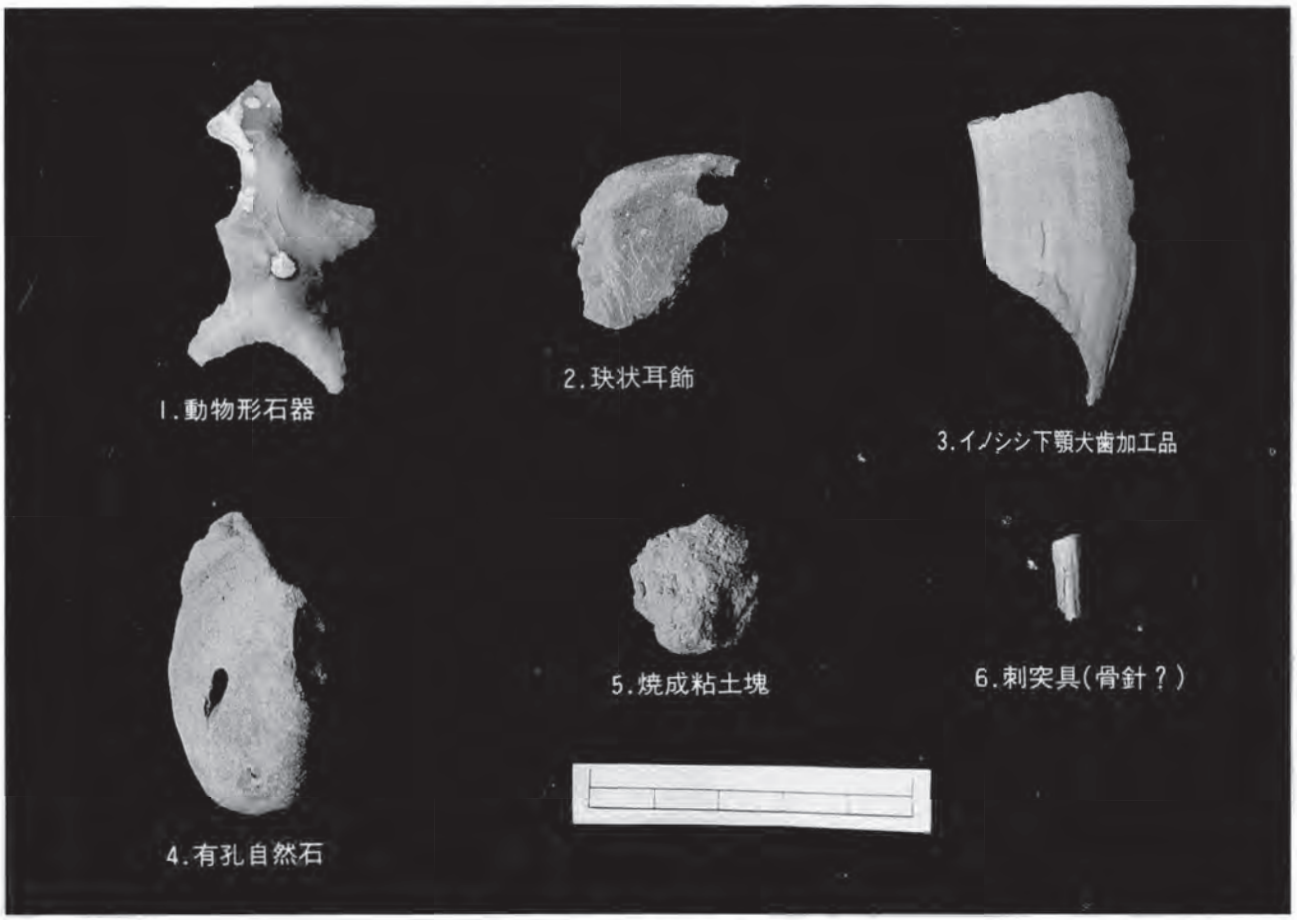
自然遺物出土状況（No.21グリッドⅡd層ーシカ肩甲骨、椎骨、イノシシ肩甲骨等）



自然遺物出土状況（No.21グリッドⅢb層ーヒト上腕骨、尺骨、タヌキ下顎骨等）

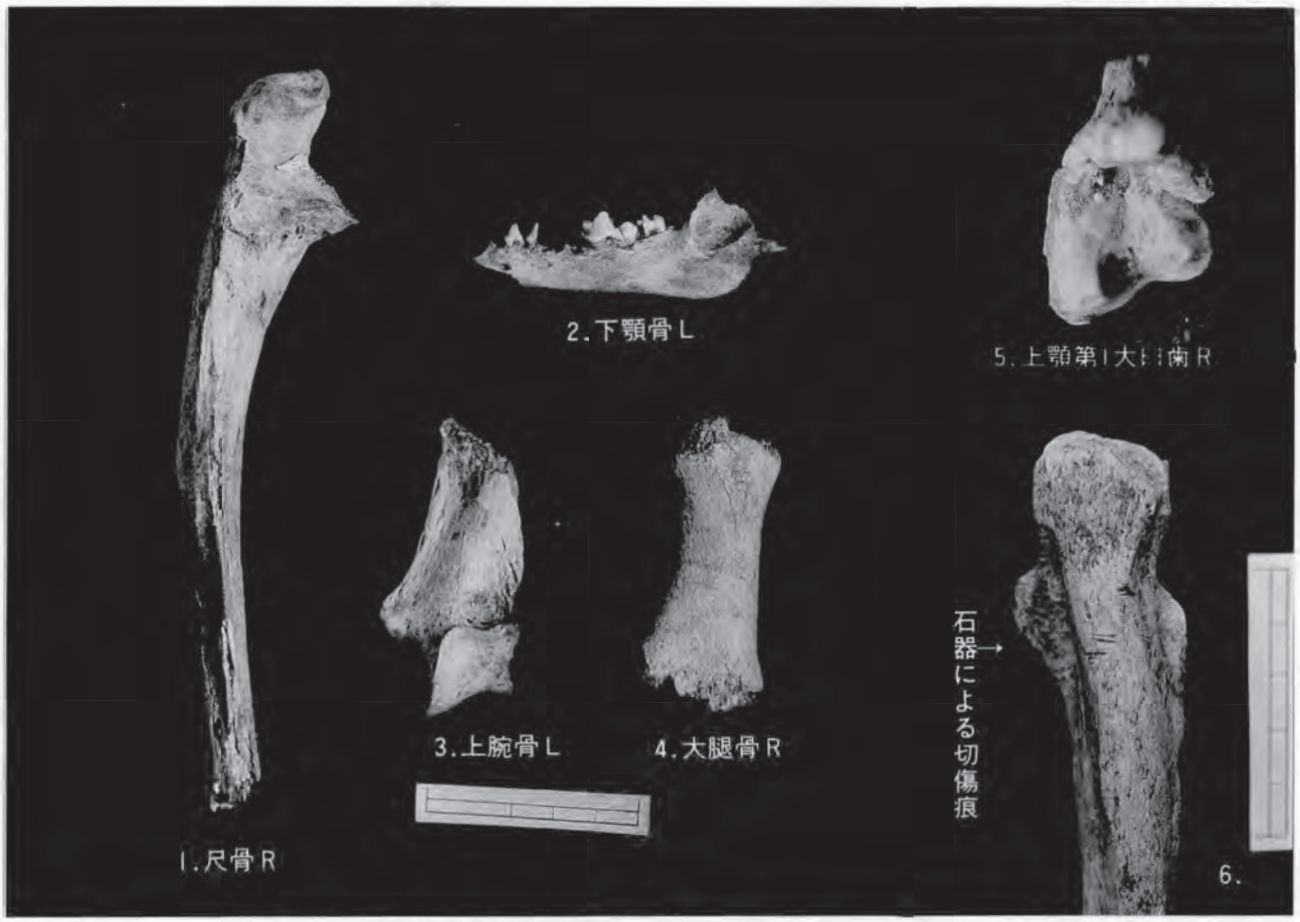
第10図版

自然遺物出土状況（No.21グリッドⅢb層ータヌキ下顎骨）



出土遺物 （土製品、石製品、骨角器）

第11図版

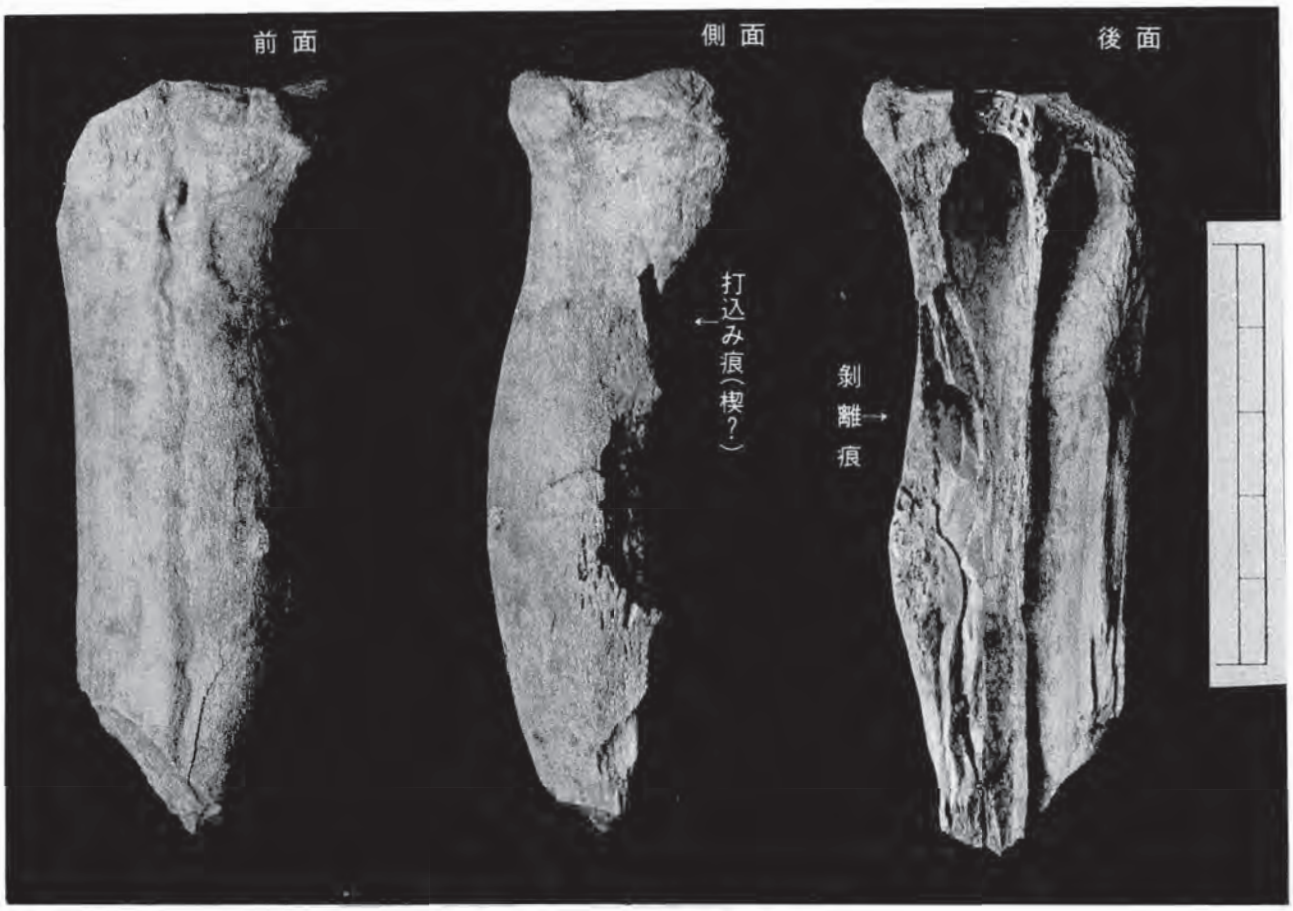


出土遺物（ヒト1，3，6、タヌキ2、イヌ5、鰭脚類の一種4）

出土遺物 （イノシシ）

第12図版

出土遺物　(シカ)



出土遺物　(シカ－7中手骨(奇形)R)

出土遺物 （魚骨など、Scale.x2）

1．カツオ主上顎骨R　2～5．カツオ椎骨　6．ブリ腹椎
7・8．マグロ類棘　9．タイ歯　10．カサゴ類尾椎
11．不明魚骨　12．アイナメ尾椎　13．ウニ殻(ムラサキウニ？)
14．鱗（種不明）　15．ムラサキウニ棘
16．イノシシ下顎犬歯L　加工品（第10図版－3）
17．刺突具（骨針？）（第10図－6）　18．加工痕のある鹿角

宮古市埋蔵文化財調査報告書13

崎山遺跡群 I

—昭和61年度発掘調査概報—

1987.3

発　行　　岩手県宮古市教育委員会
宮古市新川町２番１号

印　刷　　株式会社　文　化　印　刷
岩手県宮古市大通２丁目５の２